

『中学生のみた昭和10年代』と個人生活史研究：三段階の分析の試み(下) (3)

水野, 節夫 / ミズノ, セツオ / MIZUNO, Setsuo

(出版者 / Publisher)

法政大学社会学部学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

社会労働研究 / Society and Labour

(巻 / Volume)

44

(号 / Number)

2

(開始ページ / Start Page)

219

(終了ページ / End Page)

125

(発行年 / Year)

1997-12

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00018865>

19. 中野卓, 1988, 「或る大正生まれの自分史 (1) [幼年・小学生・中学生時代]」, 『中京大学社会学部紀要』, 2 (2): pp. 1-65.
20. 中野卓編著, 1989, 『中学生のみた昭和十年代』, 新曜社.
21. 中野卓, 1990, 「『中学生のみた昭和十年代』拾遺 (1)」, 『中京大学社会学部紀要』, 第5巻, 第1号, pp. 43-131.
22. 中野卓, 1991a, 「『中学生のみた昭和十年代』拾遺 (2)」, 『中京大学社会学部紀要』, 第5巻, 第2号, pp. 63-143.
23. 中野卓, 1991b, 「『中学生のみた昭和十年代』拾遺 (3)」, 『中京大学社会学部紀要』, 第6巻, 第1号, pp. 23-199.
24. 日本放送協会編, 1977a, 『放送五十年史』, 日本放送出版協会.
25. 日本放送協会編, 1977b, 『放送五十年史 資料編』, 日本放送出版協会.
26. 佐藤忠男, 1995, 『日本映画史 第1巻 1896-1940』, 岩波書店.
27. 清水晶, 1991, 「日本における戦争と映画」, 清水晶他, 『日米映画戦——パールハーバー五十周年——』, 1991, pp. 7-77.
28. 塩澤実信, 1995, 『ベストセラーの光と闇』, グリーンアロー出版社.
29. 立川昭二, 1992, 『昭和の蜚音』, 筑摩書房.
30. 谷川義雄編, 1993, 『年表・映画100年史』, 風濤社.
31. 山田和夫, 1997, 『日本映画101年——未来への挑戦——』, 新日本出版社.

名古屋大学出版会.

5. 林他編, 1984, 『例解新国語辞典』, 三省堂.
6. 廣澤榮, 1989, 『私の昭和映画史』, 岩波新書.
7. 岩崎爾郎, 1982, 『物価の世相 100 年』, 読売新聞社.
8. キネマ旬報社, 1936-1939, 『キネマ旬報』, No. 562; No. 573-575; No. 577-578; No.580; No.584; No. 589; No. 591; No. 595-597; No. 601; No. 603-604; No. 606; No. 608 ; No. 623-625; No. 632; No. 634; No. 642; No. 644; No. 650-651; No. 655; No. 657; No. 659-661; No. 664; No. 667; No. 672-675; No. 677-678; No. 702 の各号.
9. 講談社編, 1989a, 『昭和二万日の全記録 第 4 卷 日中戦争への道 昭和 10 年-12 年』, 講談社.
10. 講談社編, 1989b, 『昭和二万日の全記録 第 5 卷 一億の「新体制」昭和 13 年-15 年』, 講談社.
11. 正木ひろし, 1991, 『近きより 1 日中戦争勃発 (1937-1938)』, 社会思想社.
12. 水野節夫, 1992a, 「『中学生のみた昭和十年代』と個人生活史研究——三段階の分析の試み——(上)」, 『社会労働研究』, 第 38 卷, 第 3・4 号, pp.80-118.
13. 水野節夫, 1992b, 「『中学生のみた昭和十年代』と個人生活史研究——三段階の分析の試み——(中) -1」, 『社会労働研究』, 第 39 卷, 第 2・3 号, pp. 342-370.
14. 水野節夫, 1993a, 「『中学生のみた昭和十年代』と個人生活史研究——三段階の分析の試み——(中) -2」, 『社会労働研究』, 第 39 卷, 第 4 号, pp. 189-211.
15. 水野節夫, 1993b, 「『中学生のみた昭和十年代』と個人生活史研究——三段階の分析の試み——(下) -1」, 『社会労働研究』, 第 40 卷, 第 1・2 号, pp. 109-153.
16. 水野節夫, 1994, 「『中学生のみた昭和十年代』と個人生活史研究——三段階の分析の試み——(下) -2」, 『社会労働研究』, 第 40 卷, 第 3・4 号, pp. 346-383.
17. 水野節夫, 1995, 「ある告白の再解釈の試み」, 中野・桜井編, 『ライフヒストリーの社会学』, 弘文堂, pp. 137-166.
18. 水野節夫, 「『ユキの日記』に見る<生>の軌跡」, 未公表 (1996 年 5 月脱稿).

『中学生のみた昭和十年代』と個人生活史研究

の結果からも知ることができる。調査報告の概要には、「戦況ニュースは他の種目より著しく高い視聴率を示してゐた」とあり、午前 6.55 (67%); 午後 0.30 (71%); 午後 4.00 (68%); 午後 7.00 (89%); 午後 9.30 (88%); 「今日のニュース」(53%) という放送時刻別のニュース視聴率があげられている(日本放送協会編[1977b:p.536])。

- 5) 『昭和二万日の全記録 4』(講談社[1989a])には「あいつぐ一流音楽家の来日」(pp.186-187)という特別記事があるのだが、それによるとこの時期、つまり昭和10年から12年の中頃にかけての時期には、例えば、昭和10年4月ルビンシュタイン(ピアノ)、5月ジンバリスト(バイオリン)、昭和11年1月シャリアピン(歌手)、2月リリー・クラウス(ピアノ)とシモン・ゴールドベルグ(バイオリン)、3月ウィルヘルム・ケンプ(ピアノ)、4月エマニュエル・フォイヤーマン(チェロ)、5月ジャック・ティボー(バイオリン)、8月ヨセフ・ローゼンストック(指揮者)、翌年の5月にはフェリックス・ワインガルトナー(指揮者)といった具合に外国演奏家たちが続々と来日している。中野さんが『中学生』で言及しているフォイヤーマン、ティボウ、ワインガルトナーといった音楽家たちこそは、まさにそうした一流音楽家たちの来日ラッシュの最後の波そのものだったのである。
- 6) 昭和12年の『番組種目嗜好および聴取状況[に関する]逓信省・日本放送協会調査(全国)』(日本放送協会編[1977b:p.601])によると、歌謡曲(全国平均75.5%)や国民歌謡(64.3%)、唱歌(軍歌・校歌・産業歌等)(55.2%)の嗜好率がかなり高かったのに対して、中野さんの好きだったジャズの嗜好率は22.8%で、同じく中野さんが耳を傾けていたヴァイオリン・チェロの29.7%やピアノ・オルガンの24.5%の低さとともに放送種目としては人気のない部類に属するものである。こうした数字からも、中野さんの聴取傾向は当時のラジオ音楽状況の中では少数派の位置を占めていたことがわかる。

『中学生』論文(下)-3のための参考文献一覧

1. 文藝春秋編, 1995, 『「文藝春秋」にみる昭和史(一)』, 文春文庫.
2. S.フロイト, 1917=1977, 『精神分析入門(上)』, 高橋・下坂訳, 新潮文庫.
3. 學燈社編, 1993, 『國文学臨時増刊号 明治・大正・昭和風俗文化誌』, 學燈社.
4. ピーター B.ハーイ, 1995, 『帝国の銀幕——十五年戦争と日本映画——』,

独立の分析対象として設定する必要を感じないからである。

- 2) 実を言う『物価の世相 100 年』にのっている娯楽場入場費の額は本文であげた 22.6 銭ではなく 20 銭である。ただし、これは 1 カ月の男女平均が 1 円 87 銭の時に対応する数字である（岩崎 [1982 : p.95] ）。そこで、本文では、この点を考慮に入れて中学校男生徒の場合（1 カ月 2 円 11 銭）に対応する額に換算して計算し直してある。
- 3) 谷川（1993 : p.91）では「淑女は何を忘れたか」の順位は第 7 位となっているが、(a) ぼくのコピーした『キネマ旬報』の写真記事には「淑女は何を忘れたか」は第 8 位と書いてあること（現物は持っているのに間違いはないのだが、『キネマ旬報』の本文ではないらしいので頁数がついていない）(b) 谷川（1993）の順位表では「淑女は何を忘れたか」はすぐ上のこれまた第 7 位の「人情紙風船」とすぐ下の第 9 位の「大阪夏の陣」とに挟まれているのが、第 7 位ではなく第 8 位の印刷エラーだった可能性もあること、この 2 つの理由から本文では＜「淑女は何を忘れたか」＝第 8 位＞説を採用している。
- 4) ラジオの臨時ニュースは昭和 6 年の満州事変以降、とりわけその需要が急速に高まりつつあったものだが、この臨時ニュースの取り扱いをめぐっては昭和 10 年当時ラジオと新聞との間に相当の緊張関係が見られたようだ。当時「ラヂオ・ニュース放送時間問題」と言われていたもので、速報性という面でどうしても遅れをとらざるをえないためにラジオによる臨時ニュース攻勢に脅威を感じていた新聞各社は何とか巻き返しを図ろうとしてラジオ側に詰め寄った。その点を象徴的に示しているのが、在京新聞社幹部による「二十一日会」の代表による臨時ニュース放送中止要望の動きである。昭和 10 年 4 月 22 日付けの「ラヂオ・ニュース放送時間に関する『二十一日会』書簡」には「放送ニュースは新聞記事の所謂アッペタイザーとして放送すべきものにして、新聞並びに通信社と競争的立場に於て為さるべきものに非ずとの主旨」から「貴協会 [= 日本放送協会] に於て自発的に現在の 1 日の総放送時間 75 分を 70 分程度に短縮する挙に出られ……」という妥協が図られている（日本放送協会編 [1977b : p.285] ）。しかし実際はその後、時代の要請を体現する形で、先に映画のセクションで見たニュース映画の隆盛とともにラジオの臨時ニュースの重要性が増していくことになる。

なお、臨時ニュースだけでなく定時のラジオニュースそのものがよく聞かれていたことは、昭和 12 年 11 月 26 日から 28 日にかけて行なわれた『番組種目嗜好および聴取状況 [に関する] 逓信省・日本放送協会調査（全国）』

と、あるいはやろうとしていることをより正確に表現しているのではないかと思うようになったということである。この‘個人’現象の分析・解釈への貢献の内実をより具体的に定式化すれば、ぼくが《‘個人’現象（もしくは個人学）への事例媒介的アプローチ》と呼ぶことにしているものとなる。ぼくはすでに別の個所で、「ここで個人学というのは、《研究の焦点を具体的な個人におきながらその個人のありように可能なかぎり肉薄していこうとする研究》のことを指す。また、事例媒介的アプローチというのは、《(a) 先ずある研究対象の事例を特定化したうえで、(b) その個別具体的な事例の解明を第一次的課題として設定し、(c) この課題の達成を通じて間接的に研究対象への接近を試みようとするやり方》のことである。」（水野 [1996]）と述べておいた（なお、《個人学への事例媒介的アプローチ》という定式化を初めて公表したものとしては、水野（1995）の注（2）[pp. 164-165]を参照されたい）。そして先に〈(1) ここでは一体何をしてきたのか〉で、中野さんの社会的自己形成という主題との関連における《『中学生』から浮かび上がってくるものの特定化》、《関連データの絞り込みのプロセスの明示化》、《分析視点や分析枠組みの構築・動員・活用を通じてのデータ対話型議論の実践の試み》という形で定式化しておいた内容こそ、本稿に即した場合のこのアプローチの、より具体的な内容ということになる。そしてこうした意味での事例媒介的アプローチを提起し、その具体的実践成果を提示したことこそが、質的データの分析・解釈という分野における本研究の意義であり貢献の中身と考えているものである。

注

- 1) 同じくミックスの例として位置づけることのできるものに新聞があるが、本稿ではこれを主題的に取り上げることはしない。中野さんの時局との関わりを見ていく上で新聞情報が重要な意味を持っていることは十分認めた上で、にもかかわらず、少なくとも『中学生』のテキストで見る限り、これを

じることにはしたい。

『中学生のみた昭和十年代』と個人生活史研究』という論文のタイトル自体が指し示しているように、ぼくは当初、個人生活史研究の個別具体的実践をやるという意識でもってこの論文の執筆を進めていた。そのことは「はじめに」での次の2つの文章にも見て取ることができる。一つは「ぼく自身が現時点で持っている個人生活史についてのイメージを前提にした上で、個人生活史的観点から中野卓さん編・著『中学生のみた昭和十年代』…を分析・解釈したとすると、どういうことになるだろうか——ここでやってみたいのは、このことである」（水野 [1992a: p. 81]）という書き出しの文章。もう一つは「…「5. 終わりに」では、ぼく自身にとって三段階の分析の試みが持っている意味を明らかにしながら、個人生活史研究にとってのこうした試みの意義について若干私見を提示したい」（水野 [1992a: p. 86]）という「はじめに」セクションの末尾の文章である。ここでのキーワードが《個人生活史》であること、並びにぼく自身現在でも個人生活史研究についてはそれなりの興味関心を持っていることも確かである。しかしながら、この論文執筆作業を進めていく過程で自分自身にとっても徐々に明らかになってきたことは、ぼくが研究目標として言語化していたものと実際の研究作業から浮かび上がってくる事実上の研究目標との間に微妙なズレが見いだされるということであった。つまり、当初は個人生活史研究への貢献の試みと考えていたものが、実は微妙にそうした研究とは異なっており——もしそうでなかったなら、先に〈(2) ここでやっていないこと〉で2つ目の視点として説明したもの（つまり、「中野さんという個人の一生を射程に入れて『中学生』を分析するということ」）を分析の準拠点として組み込んできてもおかしくないはずなのに、分析を進めるに当たってはそうした個人の一生を射程に入れた形でのデータの読み取りはまったくしてこなかったのだから——、むしろ具体的素材を相手にしながらの“個人”現象の分析・解釈への貢献と見なした方が、自分がやっているこ

次は、中野さんという個人の一生を射程に入れて『中学生』を分析するということである。現在までの中野さんの一生を射程におさめた上で、『中学生』時代の中野さんを位置づけるという作業はしていないし、そういう視点は取ってこなかった。ちなみにこの視点からの自分史の執筆という作業自体は紀要での発表という形で中野さん自身がやっけてられていることである（中野 [1988]）。

三つ目は、社会学者中野さんの原型を探るという視点である。ここでは、後に商家同族団研究以降に顕著になってくる社会学者中野さんの原型を探るという視点を採用していないことは言うまでもない。また、社会学者としての中野さんの基本特徴を析出した上で、それらの中野さんの社会的自己形成ということに関連づける時何が見えてくるか、といった問題設定の下での分析作業も行っていない。

四つ目の、よりマクロな歴史の中での『中学生』の位置づけについては、〈(9) 読書・芸術鑑賞と標語〉と〈(13) 時局観〉のセクションで同時代の情報の組み込みという作業をそれなりに試みてはいるが（そして映画サブセクションについてはそれなりの細部の書き込みを行なうことができたと考えているが）、不十分なものでしかないように思う。

五つ目は、日記研究の中での『中学生』の位置づけといった試みである。例えば同時代の他の日記群との関係において『中学生』がどういった特異性を持っているのか、いないのかといった問題にはまったく触れていないということだ。

（3） 本研究の意義——事例媒介的アプローチの提起とその具体的実践の試み——

『中学生』の実質的検討を終えた今、ぼくはこの論文の執筆過程そのものが、研究目標そのものに微妙なズレを引き起こしながら、事実上、ぼくなり分析のスタイル——事例媒介的アプローチ——を析出してきたことを感じている。ここでは、この点を簡単に説明する形で本稿を閉

による点検の結果があまりおもわしくなさそうに判断される場合には、これを深刻に受けとめて、全面的改変の可能性も含めて、積極的な組み直しという形での分析視点や分析枠組みの鍛え上げ・鍛え直しを行なうことが必要なのである。以上要するに、ぼくの考えでは、分析視点や分析枠組みが対象把握のための道具として機能しているかどうかを絶えずチェックしておくという基本姿勢を保持しておくことが決定的に重要だということである。

(2) ここでやっていないこと

ぼくが気づいている限りで、ここでやっていないことをあげておく。

まず初めは、厳密な意味で社会的自己形成をプロセスとして浮かび上がらせることである。「『中学生』[の元になった日記] 執筆当時の中野さんの社会的自己形成の過程」(水野 [1992a: p.84]) というのは、ぼくが設定した日記分析の際の統合化の視点であった。その意味では、このプロセスを浮かび上がらせていないと言うのは、それなりに深刻な事態といわざるをえないような気もするが、対象素材自体に由来する限界なのでやむをえない。このことは、すでに「はじめに」において「『中学生』の日記に見られる断片性、スケッチ性」(水野 [1992a: p.82]) という言い方で述べておいたことと密接に関わることでもある。もちろんぼくとしては、インパクト分析という形でこの社会的自己形成という視点への目配りはしたつもりだし、中野さんの社会的自己形成に関わる諸相については15の《結节点的事象》の分析を通してかなり細かいところまで検討したつもりなので、広義における中野さんの社会的自己形成の過程は主題的に取り上げたと考えている。しかし、《時局観》のセクションを唯一の例外として、プロセスの変化を示唆する情報が見つげにくかったという事情から、中野さんの自己の変化・持続等について明示的・体系的にそのプロセスを跡づけるということは、残念ながら、やれていないと言わざるをえないのである。

読み手との間の) 開かれた議論——ということはつまり、異論とその根拠の提示とを通しての相互批判の可能性——を保証する仕組みを作り出すことが、ここでの狙いということができる。データの分析・解釈に内在する必然的な主観性を認めた上で、素材との関連でその主観性が発揮された個所を可能な限り明示化できる仕組みを意識的に作り出すことによって、例えば、どこまでが素材を踏まえた形で出されてくる主観性で、どこからは素材とは切れたところでの、より思弁性の強い形での主観性か、といった形で、その主観性の質を相互点検することができるはずだし、質的分析・解釈の水準を上げる上では、必要だと考えているということである。

第3の、「分析の枠組みへの関心を持った読者」(水野 [1992a: p. 85]) との関連では、分析視点や分析枠組みの構築・動員・活用を通じてのデータ対話型議論の実践の試みがある。(a) 分析者の側の関心がどこにあるかの明示化、(b) 何が関連データとして含まれるか、その範囲を特定化していく際のスクリーニング、(c) 素材を束ねあげていく際の媒介、(d) 関連データのウェイトづけとその根拠づけ——こうした作業ならびに議論展開にあたって、分析視点や分析枠組みが決定的な役割を果たしていた点については、「4.2.1. 関連データの絞り込み方について」の説明、ならびに 4.2.2. で出しておいた一連の小見出し一覧が各セクションではたした役割を考えてみていただければわかってもらえるのではないかと思う。ここで強調しておきたいのは、分析視点や分析枠組みを評価する際には〈データ分析の役に立っているかどうか〉という《有用性》の基準とでも呼べるものを重視すべきであるということである。つまり、分析視点や分析枠組みというものは、第一次的には、アモルフな形であれ、分析者が見てみたいと思っているもの、漠然とながら実感レベルで感じとっているもの、そうしたものをより鮮明な形に変換していく際の媒介装置としての有用性を個別具体的な分析場面で発揮することが求められているのであり、そうした場面での《有用性》の基準

[1992a: p.84])との関連では、ここでは、中野さんの社会的自己形成という主題に関連づける時『中学生』から浮かび上がってくるものの特定化をしてきたといえることができるだろう。つまり、ぼくがここでやったことは、『中学生』に書かれているものにあくまで分析対象を限定しながら、『中野さんの社会的自己形成』という視点との関連でひっかかってくると思われる諸事象を可能な限り掬い上げてくることによって、“中野さんらしさ”とぼくが思うところのものを浮かび上がらせてくるということだったのである。その具体的成果については、「4.2.2. 中野さんの自己もしくは自己形成にインパクトを与えたと思われる諸事情」と「4.2.3. 小括」の記述にあたって判断していただきたい。

第2の、「分析のステップもしくは過程への関心を持った読者」（水野 [1992a: p.84])との関連では、関連データの絞り込みのプロセスの明示化の試みをあげることができる。分析の結果だけを提示するというのであれば、「はじめに」での問題提起を受ける形で一気に4.2.2.の〈(1) 井上先生の場合〉以下の各論の実質的内容にあたるものを書き進めていくというのでもよかったのかもしれない。しかし、そうはしなかった。それは、ぼくとしては何としても関連データの絞り込みのプロセスのうち節目となるところを可能な限り明示しておきたかったからだ。

なぜ《関連データの絞り込みのプロセスを明示すること》が大切なのか。それは、まず第1に、関連データとそうでないものとのふわけをどういう風にやったのかを読み手と共有しながら議論を進めていくことができるからであり、第2に、どうやってある議論に到達することになったのかを、プロセスとして開示していくことができるからであり、そして第3に、質的データの分析をする場合の飛躍部分（個所）をはっきりさせることができるからである。これらの理由は、相互に関連しあったものだが、要するに、《関連データの絞り込みのプロセスを明示すること》を通じて、質的分析に携わる者同士の（あるいは書き手と

ろを次の3つの観点からまとめておく。

まず《对人的ネットワーク》の観点から見た中野さんの諸特徴としては、(a)〈ロール・モデル〉としての井上先生、中尾伯父、父の存在、(b)情動的基盤としての母の存在、(c)弟をはじめとした兄弟姉妹や親族が作り出す对人的環境の相当な広がり、それから(d)増田・神谷両君を中心とした《友達の輪》の存在、の4点をあげることができるだろう。

次に《傾向》の観点から見た中野さんの諸特徴としては、(a)情動的基盤としての母とも密接な関連のある《思い出嗜好》、(b)思考スタイルとしての《自分に引きつけた読み方》、(c)学問への基本姿勢としての《〈本物の学問〉志向》と《〈実物から〉の発想と〈日本の過去〉へのまなざし》、そしてそれらを下支えするものとしての《教養重視の姿勢》とそうした基本姿勢故の驚くばかりに《はっきりとした将来設計》、(d)書きとめておくという行為に関連した《記録への執念》と《〈美しさを写しとる〉姿勢》がある。

最後に《価値観》の観点から見た中野さんの諸特徴としては、《〈非凡な凡人〉志向》と《国民の一員としての連帯意識》の2つで、論証することはしていないが、これらは、中野さんの中では相互に関連しあっていたように思う。

5. 終わりに

最後に、「はじめに」で触れておいた3種類の読者（水野 [1992a: pp. 84-86]）を念頭に置きながら、本稿では一体何をしてきたのか、またその逆にここでやっていないことは何か、そして本研究の意義についての私見、の3点について簡単に触れておくことにする。

(1) ここでは一体何をしてきたのか

まず第1の、「分析の結果そのものへの関心を持った読者」（水野

32. <可能な限り学問は楽しむという姿勢で取り組む>
 33. <可能な限り原文主義で取り組む>
 34. <勉強にはコンスタントに取り組む>
 35. <なるべく受験勉強のようなことはしない>
 36. <自分には試験勉強以外にやるべきもっと大切なことがあるんだ>という考
 え方
 37. 自分の生き方についてははっきりとした将来設計もしくは問題意識
 38. <貴重な時間としての書く時間>という発想
 39. 書きとめることへの異常なまでの執念
 40. 記録するということに対する一種の使命感
-

☆1. から 8. までの諸特徴は水野 [1994:pp.354-380] からの、また 9. から 40.
 までについては本稿からの抜き書き

[イ] <(7) 思い出嗜好> 関連

A 《思い出嗜好》：4.7.

[ロ] <(8) 哲学的思索と内省> 関連

B 《自分に引きつけた読み方》：8.13.14.15.16.19.

[ハ] <(14) 受験・勉強への取り組み方> 関連

C 《〈本物の学問〉志向》：12.31.32.33.34.35.36.

D 《〈実物から〉の発想と〈日本の過去〉へのまなざし》：
 20.21.22.23.24.

[ニ] <(15) 書きとめておくという行為> 関連

E 《記録への執念》：6.38.39.40.

F 《〈美しさを写しとる〉姿勢》：17.25.26.27.28.

[ホ] その他

G 《〈非凡な凡人〉志向》：1.

H 《国民の一員としての連帯意識》：30.

I 《はっきりとした将来設計》：37.

J 《教養重視の姿勢》：9.10.11.

K 《その他の諸特徴》：2.3.5.18.29.

以上を踏まえて、最後に“中野さんらしさ”とぼくが考えているとこ

第24表 '中野さんらしさ'を示唆する諸特徴(本論文登場順)

1. <非凡な凡人が必要>(p.355)という思考特徴; <理想的な凡人になりたい>(p.355)という価値観
2. <自分の感想や評価をかなりはっきりと示す傾向>(p.356)
3. <父の判断を全面的に肯定し, 父の言葉に感心している>(p.361); <父へのほれこみ>傾向(p.361)
4. <母にまつわる思い出が奔流のようにふきだしてくる心的メカニズム>(p.367)
5. <弟思いの中野さん>(p.369)
6. <ついつい記録してしまう>傾向(p.372~)
7. <過去との出会いが, 中野さんのうちになつかしさの感覚とでも呼べるものを生み出してくるという心理的メカニズム>(p.375); 思い出嗜好
8. <何らかの出来事に触発されて, それに反応する形で自分の考えや想いを紡ぎ出してくるというもの>(pp.377-378)
9. 《目安としての岩波文庫》という発想
10. 日本の古典を読むのは《当たり前》という発想
11. 漱石などの文学者たちの名前は口をついて出てくるのが《当たり前》という発想
12. 受験用の読書を忌み嫌う傾向
13. 《刺激を受けた個所の引用→思索の展開》というパターン; 《自分に引きつけた本の読み方》
14. 《思考表現の'駒'としての本の中の出来事などの活用》傾向; 《思考表現の'駒'的活用》
15. 気に入った標語の抜き書き傾向
16. 《ゲートへの思い入れ》の傾向
17. 音, 色彩, 構図などについての相当細かい観察力
18. 映画批評家らしいコメントの姿勢
19. 入れこんだ, もしくは引きつけた見方
20. 《実物から教材を得ながら日本の過去について考えていく》という基本姿勢
21. 古風なもの, 古いものへの熱い眼差し
22. 言葉の意味や由来に注目
23. 伝説や言い伝えへの興味
24. しきたりへの関心
25. 《美しさを写しとってくる》姿勢
26. 《色彩と音への目配り》
27. 《人間になぞらえての描写》
28. 雪と月への激しい思い入れ
29. 常日頃から軍事情勢についての情報を意識的に集める
30. 国民の一員としてのゆるやかな連帯意識
31. <単なる小手先の受験勉強ではなくて, 本当の学問をやるんだ>という基本姿勢;
<本当の学問をやるんだ>という基本姿勢

分に〈面白い〉と思えたこと（事象や出来事など）の〈真実〉を〈写しとる＝書きとめる〉という行為自体に個人的意味と社会的意義の双方を見いだしていたと考えることができるように思う。

4.3 小 括

これまで4.2.2のセクションでは、(1)から(15)までの諸事象について個別の検討を加えてきた。そしてその過程で中野さんの傾向もしくは傾向に関連のありそうな諸特徴をいくつも指摘しておいた。それらを改めて本文登場順に書き出してみると第24表のようになる。ここではこれらの個別的諸傾向もしくは諸特徴をある程度束ねあげる形で、“中野さんらしさ”の諸特徴の把握を試みたい。

まずその前段の作業として、(1)から(15)までの諸事象を次のような形で3つにふわけしておく。それらは、

- ①中野さんの《対人的ネットワーク》を示唆する諸事象（〈(1) 井上先生〉；〈(2) 中尾伯父〉；〈(3) 父〉；〈(4) 母〉；〈(5) 弟〉；〈(6) 家族・親族〉；〈(12) 対人的交流〉），
- ②中野さんの《興味関心の拡がり》を示唆する諸事象（〈(9) 読書・芸術鑑賞〉；〈(10) 民俗的なもの〉；〈(11) 自然との交流〉；〈(13) 時局観〉）
- ③中野さんの《傾向》を示唆する諸事象（〈(7) 思い出嗜好〉；〈(8) 哲学的思索と内省〉；〈(14) 受験・勉強への取り組み方〉；〈(15) 書きとめておくという行為〉）

の3つである。

今度は、③中野さんの《傾向》を示唆する諸事象をにらみながら、先に“中野さんらしさ”を示唆する諸特徴としてリストアップしてきたものをいくつかのグループにまとめあげていくと次のようになる（なお、例えばすぐ下の〈A《思い出嗜好》〉に続くコロン（:）の後の〈4〉や〈7〉などの数字は第24表の通し番号を指す）。

(10「父の説と寺内中将」, p. 138; 11「奥大原行」, p. 164), 「夢」(15「玉錦の死」, p. 232), 〈話ぶり〉(16「ヒバヤな年」, p. 240) など《つい最近おこったこと》という2つの柱を持っている。

なぜ書きとめたのか。最も多いのが、「裏で店の人らがドンドをしている。丹治さんが、もっともらしく丁稚さんらに話しているのが聞こえる。面白いから書きとめておく」(16「ヒバヤな年」, p. 240) とか、「面白き夢なれば書きとどむ」(15「玉錦の死」, p. 232) のように、〈面白いから〉という理由である。その他の理由としては、〈初めて聞いたから〉(10「父の説と寺内中将」, p. 138) や〈古風だから〉(5「知井坂越え小浜・海津の旅」, p. 80) がある。

今度は、書くことに対する中野さんの基本姿勢の確認である。「僕はこの日記を、自由に、面白く、おどけて、まじめに、真実を書きたいと思う」(1「中学生の買った自由日記帳」, p. 2)。この引用は、すでにテキストのタイプわけの議論の個所(水野 [1993a: p. 203])で行なったものだが、ここではもう一つ、中野さんが『中学生』の冒頭近くで日記執筆の意図について触れた個所から次の部分を引いておくことにする。「僕はこの一冊に、僕の真のすがたをうつそうとする」(同, p. 2)。

中野さんにとっての書くことの意義を考えていく上では、姫路高校合格の前後の時期の日記の空白について触れている次のくだりが参考になる。「久しく日記を書かなかった。この大転機における僕の生活記録の中断は、後世、僕の伝記を作るひとに残念に思われるだろう」(18「姫高合格」, p. 251-2)。「後世、僕の伝記を作るひと」云々といった発想自体はぼくにはよくわからないところがあるが、それはともかくとして、このくだりを読むと、中野さんが自分にまつわる事象を書きとめておくこと、記録するということは後世に受け継がれていくべき価値のあることだと考えていたこと、まただからこそ、記録するということに対して一種の使命感のようなものを持っていたことがわかるはずだ。

こうして見てくると、社会観察の鋭い眼を持っていた中野さんは、自

第23表 《書きとめておくという行為》への言及のある小見出し一覧

-
- ◎ 1「中学生の買った自由日記帳」(1) ◇ 2「『京二中』と私」(1) pp.3-4
pp.1-3
- ・ 3「春休み予定」(3) p.31 ◇ 4「試験の終り」(5) pp.59-60
- ◇ 5「知井坂越え小浜・海津の旅」(7) ・ 6「冬休み近く」(10) p.113
pp.76-83
- ◇ 7「勘太先生と女中」(10) pp.116-117 ・ 8「一子ちゃん新夫妻入洛」(10)
pp.127-128
- ・ 9「新四年生の四月」(10) pp.128-130 ・ 10「父の説と寺内中将」(11) pp.137
-138
- ・ 11「奥大原行」(12) pp.157-164 ・ 12「祭の日の昔噺」(16) pp.192-195
- ◇ 13「想旅慕雲」(17) pp.203-204 ◇ 14「再び菅平」(18) p.220-221
- ◇ 15「玉錦の死」(18) pp.231-232 ◇ 16「ヒバヤな年」(19) pp.240-241
- ◇ 17「小吉郎師匠」(19) pp.243-244 ◇ 18「クオバディウスと枚方火災」(20)
pp.248-250
- ◇ 19「姫高合格」(20) pp.251-254
-

ところが何か所かある。ここではそうした個所を手がかりにして、中野さんにとっての書くことの意味もしくは意義という問題を考えてみたい。

まずはじめに、中野さんはどういう中で書いていたのかを見ておこう。「試験の前夜に、こんなことを書いている」(4「試験の終り」, p. 60)。「明日から学校が始まるのだから、とにかく予習をやらにゃならんから、日記はこれぐらいにしておく」(8「一子ちゃん新夫妻入洛」, p. 128)。このように中野さんは、時間に追われている時、そんなことをしている暇などないだろうと思われるかもしれない時、受験準備や学校の勉強に必要な時間のプレッシャーにも負けず書いている。

では、何を、なぜ書きとめていたのか。

何を書きとめていたのかと言えば、基本的には生活記録と言っていい。その中身は、大ざっぱに言って、〈古風な言葉〉(5「知井坂越え小浜・海津の旅」, p. 80), 「昔の話」(12「祭の日の昔噺」, p. 192), 「思い出噺」(17「小吉郎師匠」, p. 244)といった《昔のこと》と、「会話」

最後に、中野さんがそうした基本姿勢をはぐくむ上で関連のありそうな事情もしくは契機を3つほどあげておきたい。

まず第1は、すでに〈(1) 井上先生の場合〉や〈(2) 中尾伯父の場合〉で詳しく見ておいたように、中尾伯父や、とりわけ井上先生の対人的影響である。第2は、これまた〈(8) 哲学的思索と内省〉のセクションで紹介しておいたように、中野さん自身が自分の生き方について非常にはっきりとした将来設計もしくは問題意識を持っていたこと。そして第3は、昔の二中生という観念が規範意識として作用していた可能性である。この第3の事情を直接示すデータは、残念ながら『中学生』には見当たらないが、しかし例えば、「博物の時間、講義の最中に突然、アゴさん[=アゴ先生]が叫ぶ。『一体おまえら、今日はどうしたんじゃ。元気のない顔で。…』…反省すべきだ。むかしの二中生はこんなじゃなかったんだろう」(13「博物のアゴさん」, pp.61-2) といったくぐりたりは、こうした脈絡で——つまり、準拠点としての昔の二中生という観念の存在を指し示すものとして——読むことができるはずである。

(15) 書きとめておくという行為 (第23表参照)

「書きたいが時間がない。もう試験まで十日」(6「冬休み近く」, p.113) とか、「…十二時過ぎてからこの日記をつけはじめたが、あと一時に十分しかない。しかし、この時間は無駄ではないつもりだ」(7「勘太先生と女中」, p.117) といったくぐりに接すると、中野さんの中に、〈貴重な時間としての書く時間〉という発想が根づいていたことがよくわかる。中野さんが書きとめるということを貴重な行為と見なしており、書くことに非常な意欲というか、異常なまでの執念をもっていたことは確かである。それにしても中野さんはなぜこれほどまで書くということに執着していたのだろうか。『中学生』の中には、例えば「バスのなかの会話が面白かったので書きとめた」(11「奥大原行」, p.164) のように、わざわざ〈…だから書きとめている〉とはっきりと書いている

ない自分の姿を書きとめているが、ここに読み取れる〈自分には試験勉強以外にやるべきもっと大切なことがあるのだ〉という考え方も〈本当の学問をやるんだ〉という基本姿勢と共鳴しあうものである。そして、高校不合格という一大危機に陥っていた中野さんが、これを、ゲーテの思想を媒介にして試練としての不合格という形で受けとめながら乗り切った点については、これまた〈(9) 読書・芸術鑑賞と標語〉のセクションで見たわけだが、そうした受けとめ方が可能であった理由の一端は、これまで見てきた中野さんの基本姿勢、とりわけ〈自分には試験勉強以外にやるべきもっと大切なことがあるのだ〉という考え方を精神的支えにしながら生きていたということと密接に関係しているように思う。

そしてこうした基本姿勢を日常的に実践していたからこそ、例えば「うっちゃうことだけはしていないのを唯一の慰めとしている」(25「あと五日」, p.178)といった自負がでてくるわけだし、「[学年末試験は]『ああ、すんだ』、こんなに書くよりほか仕方がない。／校長の終業式辞『今日で、マ、試験はすんだワナ。マ、エーワナ。ミンナ、ホガラカデ、エエジャロウ、ナ』」(5「春休み予定」, p.31)とか「二・二六事件以来の流行言葉で教師いわく『生徒諸君に告ぐ。今からでも遅くはない。勉強しなさい。試験日割りはまだ発表されたのだ』」(10「学期末試験前」, p.56)といった、試験をめぐる情景をユーモアを交えながら写し取っていただけるだけの心理的余裕が見られるのだろう。

なお、〈生徒諸君に告ぐ。今からでも遅くはない〉というのは、言うまでもなく、二・二六事件の時戒厳司令部が流した説論文放送の文句をもじったもので、中野さんが述べている通り、当時相当巷に流布していたようだ(講談社 [1989a: pp.138-139])。中野さん自身、この放送の文章が気に入っていたらしいことは、「本日 [=2月29日] 早朝ラジオで報ぜられた『兵に告ぐ』と言う文章は実に名文であった。」(3「二・二六事件」, p.25)という書き方からもわかる。

といった形で、そして消極的には、

④ 〈なるべく受験勉強のようなことはしない〉

という姿勢の堅持という形で、現れている。①は、例えば、「この頃、地理の学習が非常に興味あるものになってきた。…もう暗記などしないぞ。[入試まで] あと四日間、地理学を楽しもう」(25「あと五日」, p. 178) と、高校入試直前というぎりぎりのところにきても〈学問を楽しもう〉という姿勢を貫徹している姿に見て取れるものだし、②は、「たにさきうじの げんじ をよむ。いわなみぶんこの げんぶんを じびきをひきつつ たにさきうじの げんだいごやくを たすけにして よむ…」(42「風邪」, pp. 245-6) という源氏物語への取り組みの中にその例示が見られる。また、③の例は、すでに先に〈インパクトを与える可能性のあるもの〉の1例として矢田部先生とのやりとりを紹介したところ(水野 [1993b: p. 130]) で見ておいた(「国副…の『つれづれ草』を予習していく量も質も、これを習い始めた当時と少しも変わっていない。…」[17「偶感」, p. 91])。時間との闘いの中でやむをえず「モグリ——漢文の参考書——を買っ」(16「六月の日々」, p. 64) た時の悔しさについてはすでに〈(9) 読書・芸術鑑賞と標語〉のセクションで見たが、このエピソードは、④の裏返しと見なすことができるし、高校入試5日前の日記の「…自分が余り受験勉強らしいことをしなかったのにはあきれる。受験雑誌というものは買った事が無い。」(25「あと五日」, p. 178) というくだりは、明らかに④の例証である。

さらにまた、「僕はこんなさしせまった日に、勉強以外の本を読んでいたことを書きとめておかねばならない。後日このことを悔いるかも知れない。」(45「クオバディウスと枚方火災」, p. 248) とか、アレクサンドル・デューマの『モンテクリスト伯爵』を読了した後に、「こんな時に、こんな小説を読み始めたことを悔いなくてもないが、途中で止めることはできなかった」(40「モンテクリスト伯」, p. 237) と、悔いの気持ちを示しながらも、どうしても受験勉強以外のことをせずにはいられ

第22表 《受験・勉強への取り組み方》への言及のある小見出し一覧

-
- | | |
|------------------------------------|-------------------------------|
| ◇ 1 『京二中』と私(1) pp.3-4 | ◇ 2 「拾遺会改め史学会」(1) p.4 |
| • 3 「二・二六事件」(3) pp.21-26 | • 4 「自画像と人間論」(3) pp.28-30 |
| • 5 「春休み予定」(3) p.31 | • 6 「ファウスト」(3) pp.31-32 |
| • 7 「プチ・ショウズ」(4) pp.40-41 | • 8 「合同ハイク」(5) pp.51-52 |
| • 9 「ねぼけ」(5) p.55 | • 10 「学期末試験前」(5) pp.56-57 |
| • 11 「試験の終り」(5) pp.59-60 | • 12 「人夫歌う」(5) p.60 |
| • 13 「博物のアゴさん」(6) pp.61-62 | • 14 「席次」(6) p.63 |
| • 15 「島本先生の凱旋」(6) pp.63-64 | ◇16 「六月の日々」(6) pp.64-65 |
| ◇17 「偶感」(8) p.91 | • 18 「お菊どんの帰郷」(9) pp.107-108 |
| • 19 「冬休み近く」(10) p.113 | • 20 「正月十五日」(10) pp.115-116 |
| ◇21 「将来の志望」(10) pp.118-119 | ◇22 「久留島叔父の事故」(10) pp.133-134 |
| • 23 「松井邦子叔母再婚」(10) p.134 | ◇24 「中学最後の通知簿」(13) pp.172-173 |
| ◎25 「あと五日」(14) p.178 | • 26 「姫路行前夜」(14) pp.178-179 |
| • 27 「姫路高校受験」(14) pp.179-182 | • 28 「二次試験」(14) p.182 |
| ◇29 「谷井伯父死去と高校不合格」(15) pp.189-190 | ◇30 「増田へ」(15) p.190 |
| • 31 「想旅慕雲」(17) pp.203-204 | • 32 「兄の面会」(17) p.207 |
| • 33 「この暑さ」(17) p.209 | ◇34 「矢田部先生」(17) p.209 |
| • 35 「高原の日々」(17) pp.213-218 | • 36 「十月の日々」(18) pp.226-228 |
| • 37 「漢口陥落」(18) p.229 | • 38 「増田君との交信」(19) pp.234-235 |
| ◇39 「あと九十日」(19) pp.235-236 | • 40 「モンテクリスト伯」(19) p.237 |
| • 41 「受験直前」(19) pp.239-240 | • 42 「風邪」(20) pp.245-246 |
| • 43 「葉書交信」(20) pp.246-248 | • 44 「気晴らし散歩」(20) p.248 |
| • 45 「クオパディウスと枚方火災」(20) pp.248-250 | • 46 「滑り止め受験」(20) p.250 |
| ◎47 「姫高合格」(20) pp.251-254 | |
-

いた彼の《受験・勉強への取り組み方》の基本姿勢そのものなのである。

まずこの基本姿勢のさまざまな現れ方を確認することから始めよう。

積極的には、

- ① 〈可能な限り学問は楽しむという姿勢で取り組む〉
- ② 〈可能な限り原文主義で取り組む〉
- ③ 〈勉強にはコンスタントに取り組む〉

一色に塗りつぶされた時代は恐らく有史以来なかっただろう』と何時か父が言っていた。誠にそうだ。『国民（国家の誤）総動員法案』が目下審議中である」（26「忙中閑」, p.177）というくだりである。この引用に見られるように、父親の発言の場合には、「国家主義一色」と、〈国家〉という表現を正確に書き写しておきながら、それにすぐ続く個所では、〈国家〉とすべきところを〈国民〉と書き間違えている。この書き間違いについては、〈書き間違いには意味がある〉というフロイトの錯誤行為論の論理（フロイト [1917=1977]）を援用して、〈国民〉という観念へのこの当時の中野さんのこだわりが思わず知らず顔を出したのではないかと読みこめるように思う。さらに言えば、昭和13年6月の高校浪人日記の1冊の書き出し部分に昭和13年の代わりに「紀元二千五百九十八年…中野卓日記」（31「想旅慕雲」, p.203）と書いている点も国民の一員としての連帯意識という脈絡で位置づけることができるかもしれない。そして他方では、そうした連帯意識が硬直したものではなくそれなりの柔軟性を持っていたからこそ、軍部の動きへの違和感を軍部の中にワガママ分子がいるという形で批判したり、発禁本を読むことは国民の一員としてのあるべき姿とは抵触しないといった考え方を自然に持っていたのではないだろうか。

（14）受験・勉強への取り組み方（第22表参照）

「新しい生活が開けようとしているのだ。三年間、入学試験のためにやるのではない本当の学問が出来るのだ。ああ、勇氣よ、湧きいでよ。忍耐よ努力よ湧きいでよ」（47「姫高合格」, p.253）。これは、昭和14年4月2日、姫路高校合格後の日記の記述だが、ここには〈単なる小手先の受験勉強ではなくて、本当の学問をやるんだ〉という基本姿勢を読み取ることができるだろう。しかし、中野さんの場合、こうした姿勢はただ単に高校入学後の生活についての将来の抱負として見られるのではない。実は、すでに中学生時代・浪人時代を通して一貫して見られて

「…なかでもトランペットの音が僕の心を揺すり、僕の日さえ涙ぐませた」(42「ジャズと絶叫」, pp. 229-230) とジャズへの感動を書きとめている。さらには、中野さん自身その一員であったボーイ・スカウト運動が当時締め付けにあっていった事実に触れながら——ただし、これは編者としての中野さんの言葉だが——、「昭和十三年四月には、ついに三指礼をスカウト・サインだけとして残し、表面では五指礼を採用するとの規定を制定させられてしまいました。もちろん、三指礼を我々は仲間うちでは保持していました。」(38「店員応召とチャーヤンの報告」, pp. 222-223) と述べている。これらは、戦時意識との共振が完全であったとすれば、ちょっと考えられない言動と見ていいだろう。

なぜこうしたことが共存しえたのか。最後に、中野さんが時局を見ていた時の基本的立場についての私見を提示する形で、この疑問に答えることにしよう。

ぼくの見るところ、この当時の中野さんをその中心で貫いていた基本的立場は、国民の一員としての連帯意識、しかもかなりゆるやかな連帯意識であったように思う。この連帯意識は、すぐ上で見た挙国一致賛成の立場や漢口陥落のエピソードへの感動に容易に見て取ることができるものだが、それだけではなく、例えば、菅平への旅の途中での応召兵見送りの万歳への飛び入り参加(35「菅平行」, p. 211) や、「もっと重大な日」である自分の誕生日と並べて「も一つある。南京陥落一周年記念日でもある」(43「コトハジメ」, p. 236) とわざわざ日記に書きとめる行為としても現れている。また、中野さんが〈国民〉という発想を大切なものと考えていた可能性が高いのではないかというぼくの見方に有利な個所としては次の2つがある。一つは、友人の神谷君との久しぶりの出会いの場に出てくる話題の中に「能楽のうち…天皇の登場されるものは禁止されることにつき古典保存と国民精神のために憤慨、…」(43「気晴らし散歩」, p. 248) というくだりがあること。もう一つは、「良い意味でも悪い意味でも今日ほど全ての事が文化も経済も政治も国家主義

国民精神総動員実施要綱が発表されてから12日後の昭和12年9月25日、「鉄のやうな結束の下に全国民が唱和する『国民行進曲』を作り度い」（『東京朝日新聞』昭和12年9月22日付け）という願いをこめて、内閣情報局は『愛国行進曲』の歌詞募集規定を発表、57578編の応募があった。これは、昭和7年に東京日日と大阪毎日が募集した『日本国民歌』の応募数57195編をも上回るもので、昭和7年から12年までの間の募集歌の中では最高の応募数を誇っている。歌詞の当選発表とともに、今度は曲が公募され、これには9555曲が寄せられた。そして昭和12年12月19日、『軍艦行進曲』の作曲者でもあった瀬戸口藤吉の曲が一等となる。この「『愛国行進曲』の発表会は、一二月二六日夜、東京の日比谷公会堂で開かれ、全国にラジオで中継放送された」という。そして翌13年1月にはレコード会社6社から一斉に発売され、100万枚を超える大ヒットとなる。このように『愛国行進曲』は応募数から見てもレコード売上数から見ても大変な人気を博した募集歌だったのである（以上講談社 [1989a: p.289]）。

それはともかくこれまでの書き方からすると、『戦時意識浸透本格化』局面では、中野さんは戦時意識との波長が完全に合っていたような印象を与えるかもしれない。が、面白いことに実は必ずしもそうとは言えないのである。例えば、漢口陥落のエピソードのほんの2週間前である昭和13年10月11日には、当時発禁本となっていた石川達三の『生きている兵隊』を友人から借り受けてきてこれに目を通して（40「十月の日々」, pp.226-227）, その約10日前の9月29日には、「宇垣外相は辞職した。…軍部は時局柄ノサバツテいるのだ。政治にクチバシを入れるごときは立派な軍人とは言えぬと思う。挙国一致とは軍部ワガママを押し通すことではないと僕は信ずる」（39「九月後半の日々」, p.226）と、挙国一致には賛成しながらも軍部の動きにははっきりとしたノーの気持ちを表明している。また、漢口陥落のエピソードの4日後の11月1日には、久しぶりに聞いたジャズのことに触れながら

195)。「我が兄に召集令…が来て見ると、さすがにひとしお深く戦時意識が身にしみます」(29「増田恵一君への葉書」, p.196)。先のチャガマなどの場合もそうだが、廬溝橋事件以降、出征や召集という形で戦場への国民の大量動員が行なわれている。昭和12年の場合で召集された陸軍兵員数47万人と言われている(講談社 [1989a: p.284])。中野さんのお兄さんへの赤紙はそうした時局の中での出来事なのだ。引用からは、家族レベルにまで浸透してきた戦争という事態を中野さんがヒシヒシと実感していることや、学校関係者や親族のメンバーが次々と出征させられていった時の反応との微妙な違いも読み取れるはずだ。

三つ目は、昭和13年10月27日の漢口陥落のエピソードだ。「…ラジオが漢口陥落の公表を告げた。市中各所からサイレンが湧き起こった。ラジオは引続き愛国行進曲を奏し始めた。先生は『とうとうやったな』と言った。僕は鉛筆を持って代数をといている手がふるえる感動を握りしめた。…市電から灯のついた街を見ていると、紅い提燈を持って一人二人急ぎ足で行く人がある。もうはや提燈行列の集合場へ急ぐ人々だ。…」(41「漢口陥落」, p.229)。この文章で注目されるのは次の3つである。第1に、〈漢口陥落=手がふるえる感動〉といういわば情動レベルにまで食い込んだ形で、戦時意識との共振が見られること。第2は、この文章に書かれているような事態、とりわけ漢口陥落の知らせが提燈行列になる仕組みができあがっているといったことは漢口陥落の近いことがすでに周囲のみんなに知れ渡っていなければ不可能だということである。そうした意味で先のくだりは、戦時意識が国民全体にまで浸透しきっていた可能性を示唆するデータとして読みとれるのであって、先生の「とうとうやったな」という言葉も中野さんの「手がふるえる感動」もそうした共同主観的ひろがりをもった心理・情動の現れと見なせるだろう。そして第3は、そうした国民レベルでの戦時意識の浸透を煽り立てる仕掛けとしての『愛国行進曲』の存在である。

『愛国行進曲』というのは、この当時「公募された戦意高揚歌」である。

『中学生のみた昭和十年代』と個人生活史研究を要請されている。9月20日、東京の転向者団体代表らは国民精神総動員運動への積極的参加を決定。10月4日、大日本体育協会が国民精神総動員運動の普及に努力と決定。10月12日には、日比谷公会堂で国民精神総動員中央連盟結成式が挙行政され、翌13日から19日まで「『挙国一致時局ニ対処スル堅忍不拔ノ信念ノ昂揚ヲ期スル』…ための活動が展開され」ている（講談社 [1989a: p.280, p.282, p.286, p.288, p.290, p.294]）。

《時局の雰囲気との波長の合い方》の観点からすると、この《戦時意識浸透本格化》局面にはいくつか際立った点が見られる。

一つ目は、昭和12年11月10日の「世界の歴史は、この支那事変を一つの契機として一大転換を示すだろう。ここで日本は、漸次白人勢力を東洋から駆逐し去るのだ。孫文の言ったように、東洋は『東洋人の東洋を得んがために』立上がるのだ。それを率いるのは日本において他に無い。欧米ですら識者はこれを予知し新聞もこれを論ずるほかなくなっている」（24「妄想」, p.167）というくだりである。ここでは、「世界の歴史は…」と、ほとんど文明論的広がりをもったなかなか大きなことを言っているし、東洋の指導者としての日本という思い上がりが表明されており、しかも孫文・欧米・識者といった形で、えらいさんを出してやる思考法にはまっている。（先にあげた国民精神総動員運動の直接・間接の影響も含めて）なぜこうした発言がほかならぬこの時期に出てきたのかは不明だが、これは明らかに戦時意識へののみこまれが起きている例、中野さんとしては非常に珍しい例である。まただからこそ、編者の中野さんとしては、「このような妄想が、はずかしいけれども中学生の私の頭にも信じられていったのです」（同, p.167）と付記しているのだが。

二つ目は、昭和13年5月13日に〈兄に赤紙がきた〉ことのインパクトである。「赤紙が来た。…胸は動悸を打った。兄の招集。…事変は更に一段と深く我々の生活にはいって来たのだ」（28「兄に赤紙」, p.

検査の結果出征取り消しになった信夫氏の場合は、そのことを喜んで「人の大勢いる中なのを忘れて、『おめでとう』と言ってしまった」（22「ノボチャン出征」, p.155）叔父さんの発言を受ける形で、「これが本音で、人間本然の声なのだ」（同, p.155）と肯定的評価を書きとめているのだから。

（C3）《戦時意識浸透本格化》局面

昭和12年10月6日、ラジオで海軍飛行将校の忠二郎叔父率いる航空部隊が敵機八機を撃墜のニュースを聞いていた中野さんたちは「家中喜びの声を上げ…『すっとしやはったやろ』」（23「忠二郎叔父出陣」, p.157）という母の発言に中野さんも共鳴しているように思える。ぼくとしては、次の2つの理由から、この時には——より厳密には9月段階で——すでに《戦時意識浸透本格化》局面に入っていたと考えたい。一つは、同年9月2日、日中間の戦争拡大をふまえて政府が「北支事変」を「支那事変」と改称することに決定していること（講談社〔1989 a: p.282〕）。もう一つは、同じく9月に入った段階で戦時意識を煽り立てようとする大きな仕掛けである国民精神総動員運動が本格的に推し進められているからである。

ここで国民精神総動員運動について、より細かい経緯に触れておく。閣議で国民精神総動員実施要綱が決定されたのが、昭和12年8月24日。これは、（C2）《戦時意識浸透深化》局面の終わりの時期にあたる。しかし、この運動がさまざまな団体の賛成・協力を取りつける形で本格化してくるのは、9月9日、国民精神総動員に関する内閣告諭・訓令が官報号外として発表されて以降のことである。2日後の9月11日、日比谷公会堂で国民精神総動員大演説会が開催されたその同じ日に、全国水平社拡大中央委員会が国民精神総動員運動に参加を表明。9月13日、政府は国民精神総動員実施要綱を発表。9月16日、講談社・実業之日本社など有力雑誌社10社の社長が政府に国民精神総動員運動への協力

及しておこう。一つは、「一面の緑は今や煙で覆われた。『毒ガス』がまかれたのだ。…『ガス』の煙幕が薄れて来ると、…」(10「軍事演習」, pp.87-88) というくだりで、これは、先に紹介した昭和11年9月18日の穏やかな軍事演習風景の中に出てくる。もう一つは、同年10月1日のもので、「教練の軍事講話で、『我々は死ぬまでに一度や二度はロシヤの毒ガスをかがねばならんかもしれない』と、教官(配属将校)が言った」(13「秋の日々」, p.95) とある。『毒ガス』のうわさは、この当時巷で流布していた可能性が大きいようだ。

それはともかく、盧溝橋事件で全面戦争に入ってしまった日中両軍の軍事衝突は昭和12年8月に入るとさらに激しくなり、8月5日現在で「日中戦争勃発後八月三日までの戦死者は三六四人、戦傷者は八六九人」(陸軍省発表)、8月9日には大山事件(「上海海軍陸戦隊の大山勇夫中尉・斎藤与蔵一等水兵 [が]、上海で中国国民軍正規兵に殺害され」た事件のこと)、4日後の8月13日には第2次上海事変(「上海の中国軍 [が]、日本陸戦隊陣地を攻撃し交戦状態とな」ったもの)、8月15日、中国に対する日本政府の事実上の宣戦布告、8月23日、「上海派遣軍の第三師団(名古屋)、第十一師団(善通寺)、上海に強行上陸し、全面攻撃[を]開始」している(講談社 [1989 a: p.276, pp.278-280])。こうした中で、中野さんのまわりでも、8月24日にはチャガマというあだ名の先生の出征の見送り(21「チャガマの出陣」)があり、8月27日には分家の4男信夫氏に出征の通知が舞い込んでいる(22「ノボちゃん出征」)。

このように戦時意識は確実に浸透の度合を深めている中で、しかし、中野さんはまだ時局の雰囲気に対して微妙な距離をもちえていたようだ。なにしろ、チャガマの出征については、「今度の出征は『名誉ある軍人』とムチャクチャな教師を送りだしてしまったという二重の喜びだ。…かくて、あらゆるものに軍服を着せて祝福して送り出すのだ」(21「チャガマの出陣」, p.152) と複雑な心境を吐露しているのだし、

(C2) 《戦時意識浸透深化》局面

日中戦争の開始を告げることになった盧溝橋事件が起こったのが昭和12年7月7日。この直前の2, 3週間は、同年6月19日、「満州東部国境カンチャーズ島に約20人のソ連兵が上陸」、次の日「満州国軍の交戦」、6月26日、「満ソ国境、黒竜江のカンチャーズ・キンアムカ両島をソ連兵が占拠」、6月30日、「日満軍、満ソ国境カンチャーズ島付近でソ連軍と交戦。ソ連軍砲艦一隻沈没」（講談社 [1989 a: p.260, p.262]）と満ソ国境地帯で軍事緊張が非常に高まっている。こうした時代状況を反映して、常日頃から軍事情勢についての情報をかなり意識的に集めていたらしい中野さんは、6月30日、「『ソ連黒龍江艦隊一隻を撃沈す』という〔大阪朝日新聞号外の〕見出しの左に、…ペンで『妙な戦慄を覚えさせられる』と書き添えてい」（18「風雲急とホット・ジャズ」, p.138）る。この前後から、《戦時意識浸透深化》局面に入ったと判断する所以である。ただし、同日の日記には他方で、「海軍の士官来校し、新しく募集される甲種少年航空兵について二時間もしゃべった。…僕らには迷惑至極である。…」（同, p.138）と書いているのだから、当時の中野さんの中に時局との対峙の仕方をめぐって微妙な揺れが見られたことは確かだ。

しかし、より厳しい時代の中にあるという方向で時局認識を改めなくてはならないのではないかといった考え方に中野さんが傾いていった可能性は大きく、2週間後の7月14日の「[海軍飛行将校の] 忠二郎叔父が出張の帰途に立ち寄った。ここで一戦争おこらざるをえないそうだ。…我々がソ連のガスがかがされる時が遠くはあるまいという言葉

を、もはや冗談として聞き逃すことは出来ない。…」（19「叔父たちの時局観」, p.140）といったくだりを読むと、より厳しい時局認識をもち始めていることがわかる。

ちょっと脇道にそれるが、ここで触れられている「ソ連のガス」云々に関連して（C1）《戦時意識浸透開始》局面に見られる2つの記述に言

当の戦争と間違えているにしては呑気な嘯だ (10「軍事演習」, p. 86)

ここには緊張感を読み取ることができない。しかし、そのほぼ1週間後には、上で紹介した一連の排日事件の記述が見られることも忘れるべきではない。

同年10月3日には、すでに先に〈(3)父の場合〉(水野 [1994: pp. 361-363])で詳しく見ておいたように、名古屋の石黒氏を相手にしながら披露された父親の例の「徳利割りの侵略」という歴史認識のエピソードが書きとめられている(15「徳利割りの侵略」, pp. 103-105)。

それからさらに約3カ月半後の昭和12年1月21日、衆議院では軍部の政治介入を批判した政友会の浜田国松議員と寺内寿一陸相との間で「腹切り問答」が展開され、これがもとになって1月23日広田弘毅内閣は総辞職となり、その後の宇垣一成による組閣の試みは陸軍首脳部の組閣反対の意向のために頓挫してしまうといった一連の出来事が新聞紙上をにぎわせている(講談社 [1989 a: pp. 226-227])。これは先に触れた現役武官制の効果とでも言えるもので、この結果、軍部による政府の揺さぶりはますます激しくなっていくことになる。「陸軍はファッション化せんとしているように思われる。このごろ特に横暴だ。…こんなことは未曾有である。外国に対しても恥ずかしい話だ」(16「陸軍はファッション化」, p. 118)という中野さんの批判的発言はこうした時代状況の中でなされているものなのだが、面白いことに、この発言は先にあげた一連の事件が起こる直前の昭和12年1月17日のものなので、中野さんが直接には何を念頭においてそうした発言をしていたのかは不明である。いずれにせよ、(C1)《戦時意識浸透開始》局面においては、中野さんは時局の雰囲気に対してまだまだ批判的認識を保持しえていたと言いうことができるだろう。

なら、中野さんが日記を書き始めた時点（昭和10年11月29日）ではすでに、事実上、中野さんは《戦時意識浸透開始》局面に入っていたと見なすことができるように思う。

中山兵曹事件というのは、「上海特別陸戦隊一等水兵中山秀雄 [が]、同隊本部付近で狙撃され死亡」して問題になった事件のこと（講談社 [1989a: p. 106]）だが、ここで《戦時意識浸透開始》局面と呼んでいる時期にはすでに当時の日本中を震撼させた二・二六事件が勃発しており、中野さんもこの事件を相当細かく追っていたわけだが（1「二・二六事件」）、この時期の中野さんの時局観をうかがい知る上では、昭和11年4月8日付けの「…外蒙は完全にソヴィエートの勢力下にあり、外蒙より敵軍はちょこちょこ満州国内に手を出すらしい。もっとも、日本軍も、ちょこちょこ手を出して、お互い様かも知れぬ」（4「時局」, p. 43）というくだりが示唆的である。そこではまだ、日本軍とソ連軍の双方に対してバランスの取れた目配りをしながら、「お互い様かも知れぬ」と第三者的に突き放した見方をするだけの心理的余裕を見せている。

ちなみに時代の変化の兆しを感じさせる動きとして、この1カ月ちょっと後の5月18日には、軍部と内閣との力関係を軍部に有利な方向へと転換させる仕組みである軍部大臣および次官の現役武官制が23年ぶりに復活してくることになるのだが（講談社 [1989 a: p. 160, p. 162]）、その4カ月後の同年9月18日の時点でも、時局の雰囲気はまだまだ穏やかなものである。そのことは、次のような自分が参加した学校主催の軍事演習の様子を述べているくだりからも見て取ることができる。

…今日は陸軍の軽機関銃隊や騎兵も参加しているが、空砲の銃声は衛生掃除で畳を叩くように呑気に響く。／新築中の三軒長屋の梁の上で、大工が三人しきりにガンバレガンバレと声援している。本

『中学生のみた昭和十年代』と個人生活史研究
《時の浸透》の度合に影響される側面を持ちながらも、これとは微妙に異
なっており、時局の雰囲気とは、あるいは《対峙》、《批判的スタンス》、
《共振れ》、《のみこまれ》といった多様な関係を持ちうるものである。

すぐ上で「時局の雰囲気の浸透度を主要な軸として3つの局面を設定
する」と述べておいたが、《時の雰囲気の浸透》の度合が深まっていく
過程で《時局の雰囲気との波長の合い方（もしくは、ずれ方）》がク
ローズアップされてくるという事情を踏まえて、以下の検討にあたって
は、(イ)《時の雰囲気の浸透》の度合という軸をてがかりにして、

(C1) 《戦時意識浸透開始》局面

(C2) 《戦時意識浸透深化》局面

(C3) 《戦時意識浸透本格化》局面

の3局面を設定した上で、補足的視点として(ロ)《時局の雰囲気との
波長の合い方（もしくは、ずれ方）》にも目配りする形で、時局観の変
遷を見ていくことにする。

(C1) 《戦時意識浸透開始》局面

実を言うと、中野さんが厳密にいつの時点から〈今が戦時だ〉という
意識を持ち始めたのかという点をデータの的に確定するというのは難し
い。しかし、今ここで、ちょっとしたつばぜりあいを含めて、外国勢力
とのさまざまな戦闘状態に入ることを戦時状態と規定するとすれば、
「小学五年生の、昭和六年九月に「満州事変」が始まり、それが中学五
年生となる昭和十二年には、日中事変に拡大することになり、軍国主義
的な言動をする教員が二、三人、中学校時代の中頃から姿を見せま
す…」(4「時局」, p.42) といった記述や、その日飛び込んできた新し
い排日事件の新聞報道を書き写した後、「ちなみに昨年来の排日事件左
の如し。十年十一月九日、中山兵曹事件。[七事件の列举を中略]。十一
年九月二十四日、三水兵被射撃事件」(11「報道」, p.92) と9件の排
日事件を列举している昭和11年9月24日の日記のくだりを踏まえる

[1994: pp. 361-363]), 例えば, 学校での元配属将校島本少佐の「満州国…警備の土産嘯」(9「満州事情」, p. 85)などもこれに含まれる。中野さんは, そうした話から大きな刺激を受けるとともに自分なりの時局観を作り出していく際の肥やしにしていた形跡がある。

3つ目は, 中野さんの周囲で起こりながら, しかも時局を反映したり時局に由来していると考えざるをえないさまざまな出来事である。ここで考えているのは, 例えば, チャガマ先生の出征とかノボチャンの出征のエピソード, 忠二郎叔父の出击, 兄への赤紙等などのことだ。

中野さんはこれら3種類の契機を主要なてがかりにしながらか自分なりの時局観を作り出していったように思う。次にその内実の検討に入っていこう。

(C) 時局観の変遷

ここで時局観の変遷を見ていく際の分析軸として設定したいのは, (イ)《時局の雰囲気浸透》の度合と(ロ)《時局の雰囲気との波長の合い方(もしくは, ずれ方)》の2つである。

(イ)《時局の雰囲気浸透》の度合という言い方で着目するのは, 本人を取り囲む時代の雰囲気がどうなっていたのか, という点であり, この時代では, 事実上, 戦時意識の浸透度を意味することになる。そしてこれを大きく左右したのが, 先に構造的媒介契機としてあげておいた時局情報と周囲の人々の意見交換の話, それから時局がらみの身近な出来事であったことは言うまでもない。しかしそうした構造的媒介契機だけでなく, 政府やマスコミ等によって時局の雰囲気自体を煽り立てる仕掛けが作りだされていた点も忘れるべきではないだろう。これに対して, (ロ)《時局の雰囲気との波長の合い方(もしくは, ずれ方)》の場合には, 時局の雰囲気とそれにさらされている個人との間の関係に注目しようとするものであり, 両者の波長の合い方(もしくは, ずれ方)がどのようなものであるかを見ようとする。この分析軸は, (イ)《時局の雰囲気

(H) 《菅平グループ》

(a) 目覚め局面: 36 [〈ここは御国を何百里〉の旋律] (b) 新聞: 37

(I) 《兵営グループ》

(a) 対面 [兄との]: 34

(J) 《その他のグループ》

(a) 記念日: 35 [事変一周年], 42 [南京陥落一周年]

☆ <1>などの数字は、第14表の小見出し番号を示す。また同じ小見出しセクションに複数の情報がある場合には、<1a>や<1b>のようにアルファベットの小文字で表すことにする。それから、新聞のところに3カ所<?>がついているのは、断定はできないけれども、文面から推測すると、新聞情報ではないかと思われる、という意味である。

(B) 中野さんの時局観形成を促した構造的媒介諸契機

中野さんの時局観はどのようにして培われてきたのだろうか。大きく網を張れば、《接触回路》で触れた時局情報が何らかの影響を及ぼしていたということが出来るだろう。その点を認めた上で、ここではより狭く、相互に関連しあっていたと思われる次の3種類の構造的媒介契機に注目しておきたい。

1つ目は、新聞記事などを中心とした時局情報そのものである。例えば「驚いたことには、新聞は、またもや水兵が三名射撃され、一名即死、二名重傷と告げた。海軍は非常警戒を布き、日本領事館は引き上げを予想されるという。…」(11「報道」, pp. 91-92) とか「[昭和十二年] 七月六日、『夕刊はソ聯の三度満州国領へ侵略し我が軍を襲撃せしと報ず』。」(18「風雲急とホット・ジャズ」, p. 138) などがこれにあたる。中野さんはこうした時局情報によって、時局の雰囲気を感じとり内面化していく際に圧倒的な影響を受けた可能性が高い。

2つ目は、父親やおじさんたちをはじめとした周囲の人々の時局をめぐる意見交換・情報交換である。父親の時局観が中野さんに影響を及ぼしていたらしい点についてはすでに先に指摘しておいたが（水野

第21表 接触場所(社会空間)別に見た《時局情報との接触回路》のふわけ

(A) 《自宅グループ》

- (a) 新聞: ☆1a [号外], 1b [夕刊], 2, 4, 11, 12, 16, 18a [号外], 18b [夕刊], 24, 27 [?], 31, 32 [?], 39a [号外], 39b [夕刊], 39c [?]
(b) 話: (b1)父たちの話: 14, 15, 16 (b2)父の話: 25, 26 (b3)兄の話: 41 (b4)おじの話: 19, 34 (b5)ヒガシガの先生の話: 22 (b6)神戸さんの長男応召の話: 39 (b7)人の話: 1 (b8)話を聞く: 38
(c) ラジオ: 1 [臨時ニュース], 2, 7 [中継], 16
(d) 便り: 20 [叔父の礼状], 29 [増田君への], 30 [増田君からの] (e) 電話: 1, 40 [株屋からの] (f) 父の看板: 41 (g) 伝言: 22 (h) 電報: 23 (i) 赤紙: 28 [兄に] (j) 応召祝い: 30
(k) 餞別 [兄への]: 30 (l) 来訪 [祝い客の]: 30 (m) 知らせ: 39 [親類応召のため欠席の]
(n) 護国の兵士の遺骨: 40 [自宅の前] (o) 小説: 40 [『生きている兵隊』]

(B) 《学校グループ》

- (a) 教練: 13, 17 [運動会のための中隊教練], 18 [教練の筆記考査] (b1) 講話: 3, 13 [軍事講話] (b2) 講演: 18 [海軍士官来校] (c) 授業の場での発言: 5
(d) 満州国警備の土産嘯: 9
(e) 新聞: 18 [号外の音] (f) 式: 25 [始業式]

(C) 《市内グループ》

- (a) 演習: 10 [(学校主催の)軍事演習参加], 23 [防空演習] (b) 凱旋光景を見る: 6
(c) 凱旋歓迎への動員: 6 (d) 話: 33 [市内の料理屋; 戦談] (e) 式: 25 [練兵場での観兵式]
(f) 見送り: 21 [出陣見送り]

(D) 《他人の家グループ》

- (a) ラジオ: 41 [勘太先生の家] (b) サイレン: 41 [勘太先生の家]
(c) 小説: 40a [『麦と兵隊』; 生島家], 40b [『生きている兵隊』; 神谷の家]

(E) 《映画館グループ》

- (a) ニュース映画: 23, 40 (b) レポタージュドラマ: 39

(F) 《旅の途中グループ》

- (a) (二・二六事件被銃殺者の) 供養祭典との出会い: 8

(G) 《駅グループ》

- (a) 号令: 35 [駅員の号令] (b) 見送り: 35 [応召兵の見送り; 米原駅]

とにする。

(A) 中野さんは時局情報とどこでどのように接触していたのか

中野さんの時局観を云々する前にあらかじめ押さえておかなければならないのは、時局観を形成していく際のいわば前提になる時局に関する情報との接触の問題である。つまり、中野さんは時局に関する情報とどこでどのように接触していたのか、という点をはっきりさせておく必要があるわけだ。これは要するに『中学生』の中から《接触場所》と《接触回路》とを特定化してくるということである。

第21表は、両者をクロスさせて、接触場所（社会空間）別に見た《時局情報との接触回路》をふわけしてみたものである。この表を見ながらいくつか際立った点について指摘しておこう。

まず第1は、中野さんが時局情報と触れ合う場は、圧倒的に自宅だということ、しかも、新聞・話・ラジオの3つが主要な《接触回路》となっていることである。これはすぐ後に時局観の変遷を跡づける際にも引用の形で確認することになることだが、中野さんは、自宅で新聞に目を通したり、父やおじさんたちを中心とした見近な人々の話に耳を傾けたり、ラジオに聞き入ったりする中から主要な時局情報を得ていたらしい。

第2は、学校や市内も、各々、教練や講話・講演とか演習や見送りといった形で、それなりに重要な時局情報の発信の場としての機能を持っていたらしいことである。

第3は、時局情報の《接触回路》が非常に多いということである。とりわけ、演習・見送り・式・記念日・ニュース映画といった《接触回路》は、ただ単に中野さんだけのものというよりも、同時代を生きていたかなりの人々の間で共有されていた可能性が大きいだけに、こうした《接触回路》の多さが意味していることは、この当時を生きた人々は、いたるところで時局情報に触れる機会があったということである。

第20表 《時局観》への言及のある小見出し一覧

-
- | | |
|-------------------------------|---------------------------------------|
| ◇ 1 「二・二六事件」(3) pp.21-26 | • 2 「同月同日」(3) p.28 |
| ◇ 3 「三月十日」(3) pp.30-31 | ◎ 4 「時局」(4) pp.42-43 |
| • 5 「学期末試験前」(5) pp.56 | • 6 「島本先生の凱旋」(6) pp.63-64 |
| • 7 「短いメモ群」(6) pp.68 | • 8 「知井坂越え小浜・海津の旅」(7)
pp.83 |
| • 9 「満州事情」(8) p.85 | ◇10 「軍事演習」(8) pp.85-88 |
| ◇11 「報道」(8) pp.91-92 | ◇12 「母飛び帰るの報」(8) pp.92-93 |
| ◇13 「秋の日々」(8) pp.95 | • 14 「名古屋の石黒夫妻」(9) pp.99-103 |
| ◇15 「徳利割りの侵略」(9) pp.103-105 | ◎16 「陸軍はファッション化」(10) p.118 |
| • 17 「井上先生と」(10) pp.130-131 | ◎18 「風雲急とホット・ジャズ」(11)
pp.138-140 |
| ◇19 「叔父たちの時局観」(11) pp.140 | • 20 「忠二郎叔父より」(11) p.150 |
| ◇21 「チャガマの出陣」(12) pp.151-154 | ◇22 「ノボチャン出征」(12) pp.154-155 |
| ◇23 「忠二郎叔父出陣」(12) pp.156-157 | ◎24 「妄想」(13) p.167 |
| • 25 「昭和十三年正月」(13) pp.171-172 | ◇26 「忙中閑」(14) p.177 |
| ◇27 「姫路行前夜」(14) pp.178-179 | ◇28 「兄に赤紙」(16) p.195 |
| ◇29 「増田恵一君への葉書」(16) p.196 | • 30 「兄の応召」(16) pp.198-202 |
| • 31 「想旅慕雲」(17) pp.203 | • 32 「ノア・ノア」(17) pp.205-206 |
| • 33 「忠二郎叔父帰宅」(17) pp.206-207 | • 34 「兄と孝吉っとな」(17) p.208 |
| • 35 「菅平行」(17) pp.210-212 | • 36 「横笛」(17) p.212 |
| • 37 「高原の日々」(17) pp.216 | ◇38 「店員応召とチャーヤンの報告」(18)
pp.222-223 |
| ◇39 「九月後半の日々」(18) pp.225-226 | ◇40 「十月の日々」(18) pp.226-228 |
| ◎41 「漢口陥落」(18) p.229 | ◇42 「ジャズと絶叫」(18) pp.229-230 |
| ◇43 「コトハジメ」(19) p.236 | ◇44 「気晴らし散歩」(20) p.248 |
-

代の社会の情勢を、どう考え、これにどう対峙しようとしていたのか。また、時局の雰囲気とでも呼べるものは『中学生』の中にはどのように浸透していたのだろうか。データ分析の観点からすれば幸いなことに、『中学生』で見る限り、この両者とも変化が読み取れると思うので、以下では、時局の雰囲気の浸透度を主要な軸として3つの局面を設定する形で、時局の変遷を浮き彫りにするということをやってみたい。

が、その前に、中野さんは時局情報とどこでどのように接触していたのか、それから、中野さんが時局観を形成していく際にこういった構造的諸契機が貢献していたのか、という点についてあらかじめ見ておくこ

なかったのではないかという印象を拭いさることができない。

最後は、熊倉順吉君の場合である。突然の訪問や市電の車中での偶然の出会いで成り立っている2人の交流は、その頻度という点では決して多いとは言えない。しかし「朝、めずらしく小学校時代の友熊倉[順吉]君が訪ねて来てくれた。『君、どこや旅行してきたそうやなあ。ちょっとその話聞かしてくれんか』。『そうか、まあ上がれ』。…」(10「旧友熊倉順吉」, pp. 83-84) といった具合に、興味のあることは単刀直入に相手に聞くという(さしあたりは)熊倉君の姿勢もあってか、交流の密度ということになると、非常に濃いように思われる。

以上の検討をふまえて、最後に、《友達の輪》のイメージを使って小括的に先にあげた8人の《交流の相手》の中野さんにとっての位置づけを行なっておくことにする。

中野さんの《友達の輪》の中心部分(もしくは2つの焦点)は、(少なくとも『中学生』で見える限りでは)中野さんが一番深いところでのつきあいをしていたと思われる増田恵一君と、行動を共にする相手だった神谷寿君の2人で占められている。次に、そのちょっと外側の位置を占めるのが、はじめは一緒の行動で、後になると見舞いに行くという形でつきあいを保っていた安立巍君と時折さまざまな社会観察の報告をする形で交流していた郁生君、それに宗教を論ずる仲の明君である。そして、そのまた外側のちょっと特異な位置には、かつての親友の志水純君と、距離を保ちながらも相互に信頼しあったつきあいの相手である熊倉順吉君がいる。最後にスカウト関係のつきあいをしていた山本兄弟は、《友達の輪》に入るかどうか微妙な位置に配置できるだろう。

(13) 時局観(第20表参照)

時局。『例解新国語辞典』(1984: p. 372)では「そのときの社会の情勢」とある。ここで跡づけてみたいのは、《時局観》と《時局の雰囲気浸透度》の2つである。中野さんは同時代の時局を、つまりその時

ら、「親愛な友よ。僕の生活は怖ろしく空虚で夏は怖ろしく暑く、僕の心はひからびてしまっている。…」(20「再び葉書」, p.149) と心境の告白をしているもの、例のゲーテの思想に言及しながらの高校不合格の危機乗り切りの決意表明(31「増田へ」, p.190)、浪人の「身のたよりなさ」(32「増田恵一君への葉書」, p.196)の吐露、兄の招集の話(同, p.196)、菅平からの『永遠の夕映』の感動を伝える知らせ(39「高原の日々」, p.215)、といった具合で、相当深い水準での相互交流の様子がありありと見て取れる。

次は〈一緒〉型の神谷寿君の場合である。まず一緒に何をしていたのかを確認しておく、『裸の町』と『さびしき人』の試演会へ行っているし(14「新四年生の四月」, p.128)、高校受験も一緒に行っている(25「姫路高校受験」, pp.179-182)。面白いところでは、安立君と3人で各々が好きな本をバラバラに読みながら場を共有しているというのがある(7「ボート・レース」, p.53)。こうして見る限りでは、中野さんが自分の深いところを神谷君にどの程度見せていたのかよくわからないのだけれども、例えば、当時発禁になっていた石川達三の『生きている兵隊』を回し読みする間柄であること(43「十月の日々」, pp.226-227)や、一緒に訪れた博物館での話の内容(「試験のこと。内閣のたよりないこと。旅のこと。谷崎源氏のこと。能楽のうち…天皇の登場されるものは禁止されることにつき古典保存と国民精神のために憤慨、源氏のははき木の巻のこと。歴史の試験のこと。」[50「気晴らし散歩」, p.248])からすると、かなり深いつきあいをしていた可能性が高い。ただし、『中学生』で見ると、中野さんの増田君との交流の場合に見られたような質の情報が相対的に少ないことに加えて、神谷君の高校不合格を知った時の中野さんの何とも中途半端な対応(51「姫高合格」[p.251]を参照のこと。これは2回目の浪人という思ってもいなかった事情が関係していたのかもしれない)などからしても、神谷君との交流は、増田君との交流と類似の深さでのつきあいにまではいたってい

ミックスしたもの、山本兄弟は、もっぱら〈訪問〉型のつきあいになっている。

こうした《交流の形態》の中野さんの特徴をも考慮に入れながら、今度は、比較的情報量の多い何人かの友人たちに絞って、中野さんの(ハ)《交流の仕方》のいくつかの側面を照らし出してみることにしよう。中野さんはどういうつきあい方をしていたのか、相手に(あるいは相手は)どこまで話せているのか、どういう話題を出しているか、もしくは出せているか、といったところが、ここでの注目点である。

まず志水純君と増田恵一君の場合から。この二人はどちらも〈文通〉型に属するのだが、そこで話題になっているもので比べてみると、《交流の仕方》の内実はかなりの違いを見せている。「小学校での親友」(6「志水純ちゃんからの便り」, p.47) だった志水純君の場合、昭和9年1月の賀状では「君も十五歳になられた事を御祝致します。僕等ももうりっぱな少年です。どんな辛苦にもあたって、共にえらくなりましょう。」(同, pp.47-48) といった新年の抱負らしきものが述べられ、お互いの書き方次第では交流を深めることになるかもしれないと予感させられる内容のものだが、後の便りになると、近況報告や時候のあいさつを知らせあうというのが、基本的なところで、何をしているか(「僕も去月より台山製陶所に陶器を作りに来て居ります。」[同, p.48]; 「僕も当方で苗床やフレームに白菜・菜類・瓜類等作っております。」[同, p.49] など)、何を見学したか(「又、聯合艦隊[旅順]入港の時は[軍艦]日向を見に行ったが、…」[同, p.48]; 「四月二十日には西本願寺に花見に行きました。…」[同, p.49] など)、何が当地での話題か(「又、こちらにはアジャという超特急列車がはしっている。…」[同, p.48] など)といったことが書かれているにすぎず、これでは《对人的交流》は維持されるだろうが、深めていくことにはなりそうもない。

これに対して、増田恵一君の場合は、ズバリ「戦争はよくない。…」(19「友より葉書」, p.148) といった反戦の態度表明を伝えるものか

第 19 表 《交流の形態》の観点から見た友人たちとのつきあい方

-
- (a) 志水純…… [言及(5)☆, 賀状+絵はがき+賀状+手紙(6), 便り(13), はがき+夢(24)]
- (b) 熊倉順吉… [訪問(10), 偶然(23)]
- (c) 山本兄弟… [訪問+訪問(42)]
- (d) 増田恵一… [はがき(19), はがき(20), はがき(31), はがき(32), はがき(33), 手紙(34), 便り+はがき(35), 一緒(37), 言及+便り(39), はがき+はがき(45), はがき+はがき(49), 電話(51)]
- (e) 神谷寿一… [一緒(7), 一緒(14), 一緒(21), 一緒(25), 一緒(26), 訪問(43), 一緒(47), 絵はがき+はがき(49), 一緒(50), 電話+手紙(51)]
- (f) 安立巍…… [一緒(2), 訪問(4), 一緒(7), 一緒(16), 見舞い(41), 見舞い(48)]
- (g) 郁生…… [はがき(9), はがき(36), 言及+一緒(39), 訪問(40), はがき(46)]
- (h) 明…… [言及(5), 見舞い(17), 一緒(22), 訪問(44)]
- (i) その他…… [一緒(=小西君と)(3), 偶然(=山本君と)(8), 観察(=畑君を)(11), 催し(=同級会)(14)]
-

☆ <+>は同じ小見出しセクション内にあることを, また<(5)>などの数字は, 第 13 表の小見出し番号を示す。したがって, 例えば志水純君のところでは<賀状+絵はがき+賀状+手紙(6)>となっているのは, <6「志水純ちゃんからの便り」のセクションに, 賀状・絵はがき・賀状・てがみが, この順でのせられている>という意味である。

の観点から先にあげた友人たちの一人一人の特徴を見てみたものである。2 つほど気づいた点をあげておく。

まず第 1 は, 全体的傾向として, はがきや手紙を駆使したいわば〈文通〉型とでも言える形態が最も多く, 次いで, 行動を共にする〈一緒〉型と交流相手の〈訪問・見舞い〉型がこれに続いているということである。コストの関係という事情もあってか, 緊急時を除いて〈電話〉型の交流はほとんど見られない。

次は, 相手によって《交流の形態》に偏りがあるように思われることである。例えば, 交流の頻度が多い増田恵一君と神谷寿君の場合で見ると, 二人は共に〈中学校の友人〉なのだが, 増田君とは圧倒的にはがきなどの〈文通〉型の交流なのに, 神谷君とは基本的に〈一緒〉型である。また, 安立君や明君の場合は〈一緒〉型と〈訪問・見舞い〉型が

(C) 〈関係〉型の対人的交流について

〈関係〉型の対人的交流の中には、おたけどんや旧師（小学1年生の時の担任の先生）などとの交流もあるが、ここでは、(イ)《交流の回路》、(ロ)《交流の形態》、(ハ)《交流の仕方》の3つの観点に着目する形で中野さんの《友達の輪》の特徴をあぶり出すということをやってみたい。

まず相対的に把握のしやすい(イ)《交流の回路》と(ロ)《交流の形態》を押さえることから始めよう。

ここで(イ)《交流の回路》というのは、いつできた友人なのかとか、どういう事情でできた友人なのかといった、対人関係をもつようになった大ざっぱな目安としての時期や事情のことを指す。したがって中野さんが『中学生』の導入部分である「主な登場人物」の個所(pp. x-xii)で用いている表現で言えば、「卓の小学校の友」や「卓の中学の友」などが、ここで言う《交流の回路》にあたる。この観点から、中野さんの《友達の輪》の主要部分を構成すると思われる友人たちを絞り込めると、〈小学校の友人〉としては、志水純、熊倉順吉、山本兄弟の4人、〈中学校の友人〉としては増田恵一、神谷寿、安立巍の3人、そして〈親戚の子供たち〉としては郁生、明の2人が、各々それなりのつきあいをしていた交流相手として浮かび上がってくる。

それでは次に、これらの友人たちを分析の対象にして、中野さんの(ロ)《交流の形態》、つまり中野さんはこれらの相手とどういう形でコミュニケーションを取っていたか、という点を見てみることにする。

『中学生』に出てくる《交流の形態》としては、

- (i a) (絵) はがき, (i b) 手紙, (i c) 便り, (i d) 賀状;
- (ii) 電話; (iii) 一緒; (iv a) 訪問, (iv b) 見舞い;
- (v) 偶然 (ばったり); (vi a) 言及, (vi b) 観察, (vi c) やりとり;
- (vii) 催し; (viii) 夢

を区別することができるように思う。第19表は、この《交流の形態》

う。

一つ目は、高校受験のための宿泊先での次のような老夫婦と受験生だった中野さんたちの交流である。

『ただいま』と僕は言って[高校受験のための宿泊先にさせてもらっている]辻川さんの玄関に入った。駅前弁当氏が『二人とも[一次試験合格]』と言うと、お婆さんは我々の止めるのも聞かず爺さんを起こしに行く。寝ていた爺さんは、『そうかい、そうかい、そりゃあよかったな』と出てきて、僕が靴を脱いで上がると、僕の右手を両手で握って強く振られたのには涙の出る思いだった（26「二次試験」, p.182）

もう一つは、38「渋沢の農家」での次のような微笑ましいやりとりである。

渋沢の農家で一休みさせてもらう。／婆さん『カラッチャじゃ。どうも』。『そのカラッチャがいいダデ』と応ずると、『あんたがたにゃァ、こんなもの、まずいだろうがな』と、大根の漬物を出してくださった。『うまい、うまい』と漬物を褒めると、『おまえがたにゃァまずいじゃろ』と自説を曲げようとはせぬ婆さんの親切に、お礼に写真をとって、出来たら送ってあげよう、と言うと、『イヤだヨ。やだ。やだ』と、すこぶる元気に、だだっ子のように嫌がる（pp. 212-3）

この他にも、1「渡満部隊」での一人の兵隊さんと中野さんとの間で起こった視線のやりとりとか、39「高原の日々」でのタツオ少年との交流などがこの〈状況〉型に含まれる。

とした家族・親族との《对人的交流》については、すでに先に詳細な検討を行なっているので、ここでは、そうした人々を除いた《その他の对人的交流》、とりわけ友人関係を中心とした交流を主題的に取り上げることにする。

(A) 2種類の对人的交流——〈状況〉型と〈関係〉型——

まずはじめに〈状況〉型と〈関係〉型という2種類の对人的交流を分析的に区別しておきたい。‘对人的’という言葉には、人と人との間の‘人間的’交流という含意がある。これを逆に言えば、ぼくたちは常に相手のことを一人の人間として接している——つまり‘对人的’間柄にある——とは限らないということでもある。こうした事情をふまえて言えば、〈状況〉型の对人的交流というのは、ある特定の生活場面において、いわば‘状況’的にその場限りで生起する人と人との‘人間的’交流のことである。これに対して、〈関係〉型というのは、人と人とがそうした個別的な生活場面での一回的な出会いを超えた水準で‘人間的’交流を持続させる場合のことである。この〈関係〉型は、次の2つの場合を含む。一つは、新たに对人関係が結ばれていく局面でのもの。もう一つは、すでに成立している对人的関係を前提にした上での交流の持続・反復・強化・回復局面などでのものである。

ここで注意しておきたいのは、それ自体としては一回性を特徴とする〈状況〉型は、にもかかわらず、潜在的には常に〈関係〉型に転化する可能性を秘めているということである。とりわけ、何らかの事情や偶然から‘人間的’出会いが何度か反復されていく場合には、そうである。

(B) 〈状況〉型の对人的交流場面の実際

これまで何回か‘人間的’交流という表現を用いてきたが、この言葉の意味合いをわかってもらうためにも、『中学生』の中に出てくる〈状況〉型の对人的交流場面の実際のエピソードを2つほど紹介しておこ

第18表 《対人的交流》への言及のある小見出し一覧

-
- 1 「渡満部隊」(2) pp.13-14
 - 2 「弟の誕生日と書籍購入」(2) p.14
 - 3 「柔道」(2) p.17
 - 4 「ファウスト」(3) p.32
 - 5 「音楽と散髪」(5) pp.46-47
 - ◇ 6 「志水純ちゃんからの便り」(5) pp.47-49
 - 7 「ボート・レース」(5) pp.53-54
 - 8 「六月の日々」(6) p.65
 - 9 「母の兄中尾万三の死」(7) pp.70-76
 - ◇ 10 「旧友熊倉順吉」(7) pp.83-84
 - 11 「秋の日々」(8) pp.95-96
 - 12 「お菊どんの帰郷」(9) pp.107-108
 - 13 「春寒し」(10) p.121
 - ◇ 14 「新四年生の四月」(10) pp.128-130
 - 15 「久留島叔父の事故」(10) pp.133-134
 - 16 「松井邦子叔母再婚」(10) p.134
 - 17 「明ちゃんの結核」(10) pp.135-136
 - ◇ 18 「旧師より葉書」(11) pp.147-148
 - ◇ 19 「友より葉書」(11) pp.148-149
 - ◇ 20 「再び葉書」(11) pp.149-150
 - ◇ 21 「チャガマの出陣」(12) pp.151-154
 - 22 「明君外出許可」(12) pp.155-156
 - ◇ 23 「熊倉君のこの頃」(13) p.170
 - ◇ 24 「純ちゃんからの最後の通信」(14) pp.175-177
 - 25 「姫路高校受験」(14) pp.179-182
 - ◇ 26 「二次試験」(14) p.182
 - 27 「おたけどんの来訪」(15) p.184
 - 28 「おたけどんへの手紙」(15) pp.184-187
 - 29 「西山たけよりの手紙」(15) pp.187-189
 - 30 「谷井伯父死去と高校不合格」(15) p.189
 - ◇ 31 「増田へ」(15) p.190
 - ◇ 32 「増田恵一君への葉書」(16) p.196
 - 33 「増田恵一君よりの葉書」(16) p.197
 - ◇ 34 「火の見から見る風景」(16) pp.197-198
 - 35 「兄の応召」(16) pp.198-202
 - ◇ 36 「想旅慕雲」(17) pp.203-204
 - 37 「菅平行」(17) pp.210-212
 - 38 「渋沢の農家」(17) pp.212-213
 - 39 「高原の日々」(17) pp.213-218
 - 40 「東京の鈴木の家で」(18) pp.219-220
 - ◇ 41 「足立見舞いと月夜」(18) pp.223-224
 - 42 「九月後半の日々」(18) pp.225-226
 - 43 「十月の日々」(18) pp.226-228
 - 44 「明ちゃんと宗教を論ず」(18) p.231
 - ◇ 45 「増田君との交信」(19) pp.234-235
 - ◇ 46 「鈴木郁生君へ葉書」(19) pp.236-237
 - 47 「井上先生」(19) p.238
 - 48 「谷崎源氏」(20) p.245
 - ◇ 49 「葉書交信」(20) pp.246-248
 - 50 「気晴らし散歩」(20) p.248
 - ◇ 51 「姫高合格」(20) pp.251-254
-

いと月夜」, p.224), さらには「惜しいほどのお月夜。屋根が霜でもおいたように真っ白に照らされていた。今夜は寝るのが惜しい」(13「秋の日々」, p.95) などから十分に感じとることができる。そして「…月夜だ。…月が, 蚊帳ごしながら, まぶしい。閉じたまぶたをとおしてまで, つめたい光をなげている。なんとはなしに歌いたくなって『十五夜お月さん, ごきげんよう』と, 幼い頃の歌を歌う。まったく眠ってしまうのが惜しいような晩だ」(36「足立見舞いと月夜」, pp.223-4) という文章に出くわすことで, この印象は決定的なものとなると言っていられる。

このように中野さんの場合, 月への思い入れは相当激しいわけだが, ここで注目しておきたいのは, そうした思い入れは, 中野さん一人だけのものではないらしいということである。例えば, この当時中野さんの相当親しい友人だった増田恵一君からの葉書にも「…今頃ハ月が大変ニヨロシイデスナ。昨夜ノアノ時雨ノ後ノ月ナド, イラカノ輝キ…」(38「増田君との交信」, p.234) とあるし, これに続けて中野さん自身の返事の中にも「もう雪が僕の心に魔術をかけ始める季節だとは。月のすさまじさ, 僕は秋より冬の月が好きだ。それも雪原の夜…」(同, p.235) とある。こうして見てくると, 中野さんたちによる月についてのコメントは, いわば共同主観的色彩が強いものであって, その背後には, 月を愛でることを善しとする日本文化のプラス評価の伝統が控えているように思われる。

(12) 対人的交流 (第18表参照)

ここで《対人的交流》という場合の‘対人的’の意味内容は, 先に〈対人的対象〉論の個所で述べたことと基本的に同じことを指している。つまり, 「ここで‘対人的’というのは, ぼくたちが通常“人間関係”という場合に念頭においているものである」(水野 [1993 b: p.123]) と言っている。ただし, 井上先生との交流や, 父や母, 中尾叔父をはじめ

めたく、うまい大自然の水は、ただちにその雪に吸い込まれ、白かった雪塊は青い雪塊となる。ストックを引き上げて僕は、その青い雪に唇を付ける。紫外線で乾ききって、ひびのはいった唇で、僕は谷川の清水を吸い上げる。冷たく甘い雪の女王の接吻」(同, p. 170)

ちなみに、最後の文に見られる「甘い雪の女王の接吻」という表現は、少なくとも『中学生』では性的な雰囲気を感じさせることがほとんどないと言っている中野さんにしては非常に珍しいものであって、それだけに雪への思い入れの激しさを感じさせられるわけだ。

それはともかく、中野さんが雪に対して非常な魅力を感じていた理由の一端は、中野さんが大変スキーが好きでしかも相当うまかったという事情にあったらしい。実際、『中学生』の中には、「…しばらく心地よき直滑降の後、…ダボスの一部である斜面に出る。遠くから見たときは良いスロープに見えたが傾斜がゆるすぎて、さほど良くはなかった。…熊笹の上につむ雪にスキーの足を取られながら行き、…裏ダボスの上である。／そこを…ジグザグ・コースを取って滑り降りて、須坂路を逆行して、シャンツェの前を通り、…山小屋へ帰った」(16「菅平スキー場」, pp. 114-5) という報告にも見られるように、スキーについてのディテールが書きこまれているのだ。雪のことに触れながらスキーのことに思いをはせていると読めるくんだりとしては、「…丁稚さんが、…『風がきつうて雪で目が開けてられまへん』と、戻って来た。…こまかい良い雪だ。明日、学校があるのがうらめしい」(3「読書と冬の日」, p. 18) がある。

今度は月への思い入れである。まず中野さんがとにかく月を非常に気に入っていたらしいことは、「あまり弦月の美しい夜なので、墨をすって手習いする。『我ハ旅人ナリ』」(27「高校浪人日記の続行」, p. 202) や「今夜もお月夜。こんな夜こそショパンを聞く夜だ」(36「足立見舞

写》があげられる。例えば、「池は紺青で岸には葦がサワサワとうちなびいて、すすきの穂はうなずきあっているようにも『押し合いコンボウ』しているようにも見えた。」(14「巨椋池」, p.111) とか「…そのかわり地面を美しい紅葉の落葉が化粧していた」(1「タクシーの休車断行」, p.11)などは、そうした擬人化的描写の典型だし、「…落葉の紅も…修学旅行の一群に踏みにじられていた」(同, p.12)や「なんとなく春霞のかかった青空に、東寺の塔が突っ立っている」(5「弟も二中へ」, p.34)などもそうした描き方である。

(B) 思い入れの激しい自然対象

中野さんはさまざまな自然対象を相手にしてその美しさを描き出しているのだが、『中学生』をよくよく注意して読んでみると、とりわけ思い入れの激しい自然対象が2つほど浮かび上がってくる。それは、雪と月である。

まずニュートラルな形で雪に言及しているくだりから紹介してみよう。

…昨夜も遂に降雪なきも、雪は再結晶して、すこぶる良し。雪の面キラキラと輝き、時には五彩をなす。…北風の吹くにまかせた斜面に、小波のように風が雪を吹き散らした跡が見え、牧柵の影が雪の面に延びている。…」(16「菅平スキー場」, p.114)

次は雪への思い入れが若干感じられるものだ。「雪がふる。今夜も雪がふる。闇のなかを、ひとしれず降って、闇の中で消え失せていく。どうして積もらないのか」(22「昭和十三年正月」, p.172)。そして最後は、雪への思い入れがひしひしと感じられてくるくだりである。

雪を載せたストックの輪を、身体をかがめて谷川へひたすと、つ

映』」云々の個所を引用したが、実はその引用には「輝青色（セルリアン）が、…暗青色および濃紫色に変わって行くのです。山の端近くは淡緑色，パール・グリーン，エメラルド・グリーンの彩りで輝青色の衣装の裳裾を染めて…南アルプスの連峯はピンクに近いヴァイオレットです。…オレンジ色の雲の流れ…雲々はゴールデン・イエロー，クローム・イエロー，カドミウム色その他…」(32「高原の日々」，p.215) というまさに色彩の微妙な嬖を描き分けるくだりが続いていたのである。その他にも，例えば「…新築の講堂のクリーム色，…校門をはいったところのツツジの紅色の花，真っ白な花。…新鮮な透明な感じの紅と白。…琵琶湖がコバルト色に見えた」(7「合同ハイク」，p.51) といったように，中野さんの眼に焼きついた色彩はいたるところでこまめに書きとめられている。

中野さんが音にも相当敏感だったということは，例えば「六原小学校から子供の遊ぶ騒ぎが聞こえて来る。小学生というものは休み時間には何か知らん声を出し続けるものだ。…朝日の感触にふさわしいボーイソプラノが一群の蜜蜂の花壇を往来低回する羽音のように，この火の見まで聞こえてくる。それに校舎の卵色の壁も晴れやかだ。チリン，…チリン，…チリン，という紙屑屋の振る鈴の音も今朝の明るさにふさわしい」(26「火の見から見る風景」，pp.197-8) とか「めざましい雨の降り方だ。そのめざましさのために，雨なのにこんなに明るいのだ。ビチビチという音はブリキ樋の破れから落ちる雨水の，瓦を叩く音だ」(28「想旅慕雲」，p.204) といった記述からも見て取れる。

先に中野さんの映画の受けとめ方の第1の特徴として「音，色彩，構図などについて…そうとう細かい観察力を持っている」という指摘を行なっておいたが，自然描写という場面でもそれと類似の傾向——つまり，色彩と音をていねいに拾いあげてこようとする傾向——が非常に顕著に見られるということである。

次に自然描写の仕方の第2の特徴としては，《人間になぞらえての描

第17表 《自然との交流》への言及のある小見出し一覧

-
- | | |
|---|------------------------------------|
| • 1 「タクシーの休車断行」(2) pp.11-12 | • 2 「弟の誕生日と書籍購入」(2) pp.14-15 |
| ◇ 3 「読書と冬の日」(2) pp.17-19 | • 4 「二・二六事件」(3) pp.21-26 |
| • 5 「弟も二中へ」(4) pp.33-36 | • 6 「身辺整理」(4) pp.41-42 |
| ◇ 7 「合同ハイク」(5) pp.51-52 | • 8 「ボート・レース」(5) pp.53-54 |
| • 9 「学期末試験前」(5) pp.56-57 | • 10 「母の兄中尾万三の死」(7) pp.70-76 |
| ◇11 「知井坂越え小浜・海津の旅」(7) pp.76-83 | • 12 「父母帰宅」(8) pp.93-94 |
| • 13 「秋の日々」(8) pp.95-98 | ◇14 「巨椋池」(10) pp.110-113 |
| • 15 「冬休み近く」(10) p.113 | ◇16 「菅平スキー場」(10) pp.114-115 |
| • 17 「史学会の初瀬・大將軍山・伊那佐山行」(10) pp.121-127 | • 18 「一子ちゃん新夫妻入洛」(10) pp.127-128 |
| • 19 「新四年生の四月」(10) pp.128-130 | ◇20 「終夜演習」(10) p.135 |
| • 21 「旅の野帳風メモ」(11) pp.143-146 | ◇22 「昭和十三年正月」(13) pp.170-172 |
| • 23 「忙中閑」(14) p.177 | • 24 「盲教育展」(15) pp.183-184 |
| • 25 「白蛇」(16) pp.196-197 | ◇26 「火の見から見る風景」(16) pp.197-198 |
| • 27 「高校浪人日記の続行」(16) p.202 | ◇28 「想旅慕雲」(17) pp.203-204 |
| • 29 「梅雨キャンプ」(17) pp.204-205 | ◇30 「この暑さ」(17) p.209 |
| ◇31 「菅平行」(17) pp.210-212 | ◇32 「高原の日々」(17) pp.213-218 |
| • 33 「東京の鈴木の家で」(18) pp.219-220 | • 34 「再び菅平」(18) pp.220-221 |
| ◇35 「大丸の火事と大文字」(18) pp.221-222 | ◇36 「足立見舞いと月夜」(18) pp.223-224 |
| • 37 「漢口陥落」(18) p.229 | ◇38 「増田君との交信」(19) pp.234-235 |
| • 39 「菅平に今年も」(19) p.239 | • 40 「伊吹山」(19) pp.241-242 |
| • 41 「風邪」(20) pp.245-246 | • 42 「クオパディウスと枚方火災」(20) pp.248-250 |
| • 43 「姫高合格」(20) pp.251-254 | |
-

むらさきの入道雲が湧然と現れるほかは、視野を遮るものなし。槍・穂高…などの連山は、山脚を紫雲中に挿んでそびえ、すこし左に薄青色にかすんでいるのが八つヶ岳である。はけで一抔したように白くかすれた雲の薄いオレンジ色に染まったなかに、純白の雲が一片浮かび出している。…」(16「菅平スキー場」, p.114) といった具合になる。先に《ゲーテへの思い入れ》の激しさの例示として、「ゲーテの言った『永遠の夕

「私は偉い学者として大層尊敬していた母の兄、中尾万三伯父の死を、何一つ見落とすまいとして記録したのでした」(9「母の兄中尾万三の死」, p.73) という中野さんの観察記録の中には、この習わしが次のような形でいねいに書き留められている。「一人ずつ寝床の横へ行って、綿棒で乾いた病人の唇を水で濡らした。しかし、それもあまり水をふくませ過ぎては良くないということだった」(同, p.72)。これは、死期の迫っていた伯父さんの病床に親類のみんなが駆けつけて見守っていた時の出来事である。

(11) 自然との交流

第17表の小見出し数(43)の相対的多さからもうかがわれるように、『中学生』には《自然との交流》の場面がいくつも書きこまれている。中野さんが自然との交流を非常に大切なものと考えていたことは、『北越雪譜』や『千曲川のスケッチ』といった、自然との交流への興味関心を前提とした著作を愛読していたことから間接的に推しはかることができる。ここでは中野さんにおける《自然との交流》の特質を、(A) 自然描写の仕方の中野さんの特徴と (B) 中野さんがとりわけ思い入れている自然対象の析出という2つの観点から浮かび上がらせてみることにしよう。

(A) 自然描写の仕方のいくつかの特徴

《美しさを写しとってくる》——一言で言ってしまえば、これこそが自然描写の際の中野さんの基本姿勢と言ってもいいものだと思うが、中野さんはどういう形でこれを実現していたのだろうか。ぼくの見るところ、《色彩と音への目配り》と《人間になぞらえての描写》の2つが主要なところだ。

まず色彩面での細かい観察という点を見てみると、「気温低く、山々の樹氷が美しい。…雪の面キラキラと輝き、時には五彩をなす。…うす

「ビール事始めの噺」(25「兄の応召」, p.199), それに「女の子のあそび」としての「ポップン」と「男の子の遊び」としての「花火」の説明(3「ポップンと花火」, pp.45-46)などが, このサブグループには含まれる。

それでは最後に第1のサブグループに入るもので, しかもちょっと面白い観察が見られるものを2つほどあげておこう。

一つは乗り物についての観察で, 昔の風俗と現在の風俗との対比という形で出されている。

今朝めずらしく人力車を見た。医者らしい人が乗って, 車夫は真っ白なももひき, 足袋はだしで, 黒いはっぴ, ぴんと張った黒いひさし付きの帽子。パタッ, パタッ, パタッと軽い足取りで, リリン, リリン。威勢のいい人力車, それが, この頃, ダットサンとかいう自動車の一寸法師に圧倒されようとしている。(7「人力車」, p.59)

ここに顔を出しているダットサンというのは, 日産自動車の小型乗用車ダットサンのことだと思うが, 実は, この日記の書かれた日の前日には, 国防上の見地から, フォードやGMといった技術水準の優れた外国メーカーに圧倒されていた国産自動車の育成・保護を狙いとした法律制定の具体的な動きが見られるのである。つまり, 昭和11年5月29日というのは, 「商工省と陸軍省が共同で推進していた国産化計画の立法措置として『自動車製造事業法』が公布され」(講談社 [1989 a: p.178]) た日なのである。

もう一つは, 死に際の習わしについての細かい観察である。立川昭二氏は『昭和の登音』の中で「昭和前半までは, 死んでいく人を見送る者がよく行なう習わしがあった。死にぎわの人の唇を水でしめらすという習わしもその一つである。」(立川 [1992: p.44]) と述べているが,

だ。

一つ目は、《現在にまで生きているしきたりもしくは風俗》を記録しているもの。これは、「向い…の『佐ノ竹』のうどん屋」に出ていた「アイスクリームの機械」(4「父の講演」, p.50)とか、5月31日の「晦日うどん」(8「試験の終り」, pp.59-60), 供養の場に出てきた「万福寺…の普茶料理」(9「母の兄中尾万三の死」, p.75), お正月の行事の終わりの日の「お餅を入れた小豆粥」(14「正月十五日」, p.115) などといった〈食べ物〉系, 「御霊さんのお祭り」(5「季節は初夏」, p.55), 「稲荷祭り」(23「コドモシ」, pp.191-192), 「正月の用意を始める」「事始め」(28「コトハジメ」, p.236) などの〈お祭り〉系, それに「三井寺の婆さんの鐘の説明」(2「三井寺の鐘」, p.15) や「コドモシさん」(23「コドモシ」, p.192), 「アマケあるいはアマゲという…言葉」(27「あまけ」, p.224), 「なんとも言えぬ冬のぬくもりをなつかしむ思い」の「籠もっている」「アモという言葉」(29「愛称的敬語」, p.238), 「ヒバヤ (火早や)」(30「ヒバヤな年」, pp.240-241) などの〈言葉の由来〉系の3つが主なものである。

二つ目は、《現在のしきたり》についての観察を行なっているものだ。ここで念頭においているのは、「想像していたのとは全然違っ」て「人体焼却場とでも言うべき」「渋谷の火葬場」の情景(9「母の兄中尾万三の死」, p.74) や、「一年一度の大見切り品売り出し」に忙しい「平岡万珠堂」の様子(11「平岡万珠堂の売出し」, pp.90-91) のことだが、圧巻は「午後二時、七条大橋集合。先生方ともに三十名ほど、二列縦隊で…黄檗山万福寺の総門に入る。渡辺教頭が交渉に行かれ、皆、草履をもらい、素足になってはく。…」(22「参禅」, p.167) で始まる参禅の細かい記録で、これはまさにすぐれた参与観察の成果と言っていい。

三つ目は、《昔のしきたり》や《昔の遊び》に言及しているものである。「ひいじいさん…の日記を」ひっぱりだしてきて調べている「昔のおひたき」(13「お火炊」, p.113) やビールをビシルと読んでいたという

の旅」, p. 80) とか「『…ういことじゃ』と古風な褒め方…」(同, p. 81), 「和尚の見たがっている鉄の茶釜と, 我々の見たいと思う古風な便所」(15「史学会の初瀬・大將軍山・伊那佐山行」, p. 124) といった具合だし, 古さへの関心も, 「古い墓…井上先生はさっそく写生」(同, p. 123), 「…素晴らしい太古の巨石信仰の遺物に驚嘆した」(同, p. 125) ということになる。

次に中野さんが注目するのは, 言葉の意味や由来だ。それは例えば「八つが峰というこの山の名は, 山頂から八カ国が見えるという意味だそう」(10「知井坂越え小浜・海津の旅」, p. 79) とか「香取五神社 [の]…五とは神体が五体あるという意味だそう」(同, p. 83), 「オグラとはオウクラであって, クラとは古代の朝鮮語でムクの木のことだ。」(12「巨椋池」, p. 111) といった形で現れている。そしてこの由来への関心は, 先にあげた《日本の過去から考えていく》という姿勢や「山田の段々畑…大和民族が耕して来た古い土」(15「史学会の初瀬・大將軍山・伊那佐山行」, p. 123) とか「頂上の式内都賀奈岐神社…神武天皇のタタナメテ…と歌われた(日本書紀)と言う…」(同, p. 127) といったくだけりをも考慮に入れるなら, 日本人もしくは大和民族の由来への関心とも重なっている部分があるように思う。

また, 井上先生による弟切草伝説の話の簡単な紹介(10「知井坂越え小浜・海津の旅」, p. 77) や「火が見えぬところに牛馬を飼うと痩せるという言い伝え」(15「史学会の初瀬・大將軍山・伊那佐山行」, p. 125) があるといった調子で, 伝説や言い伝えもこまめに書き留められており, 『中学生』においてその頂点にくるのが, 20「奥大原行」で詳細に語られている「隣村の…一家四人の死にまつわった幻想的, 怪奇的な噺」(pp. 160-162) である。

(B) しきたり関係

しきたり関係は大きく3つのサブグループに分けることができそう

いくことにしよう（第16表参照）。

（A）史学会関係

史学会関係でまず注目したいのは、史学会の主旨に触れている井上先生の次のような《実物》重視の発想である。「…我々は実物から [教材を]得て、やっていこう。私も…君等と旅行すれば寝食をともにして行こう」(1「茶話会」, p.8)。もう一つは、道德のあるべき論じ方について〈日本の今を考えるには、日本の過去から考えていくべきだ〉という井上先生の立場に中野さんが共鳴していることだ。「皆、外国のままを日本にあてはめているのです。外国の事を日本に持って来るのに、昔の日本はどうだったかと考えてみるのが必要です。日本の現在の道德を考えるには、歴史上の道德からみていかなければなりません」(同, pp. 8-9)。この、《実物から教材を得ながら日本の過去から考えていく》という史学会活動を貫いている基本姿勢は、実際には、「井上頼寿先生に従っての民俗学的な行脚」(10「知井坂越え小浜・海津の旅」, p.76)や「史学会の半日ハイキング」(12「巨椋池」, p.110), 「史学会の民俗探訪の紀行」(15「史学会の初瀬・大將軍山・伊那佐山行」, p.121)といった形での現地調査となって実現されている。

この史学会の旅の途上で中野さんが関心を向けている実物をランダムにあげていってみると、爺さんのゲートル・国宝の仏像・国宝級の石塔・珍しい升二つの水車・燈楼のようなもの・木之本地蔵・香取五神社・俵をしばった家・石燈籠・民家の屋根・波模様の瓦・与喜天神・磐境（イワサカ）らしい跡・段々畑・古い墓・暗い灰色の穀物（ひえ）等など多種多様である。

では、そこでの興味関心はまったくバラバラなのか、と言うと、実はそうではなく、いくつかの収斂点を持っている。

まず何といっても際立っているのは、古風なもの、古いものへの熱い眼差しである。例えば古風については、82歳の爺さんの「言葉がまた古風で、書き留めておく値打ちがあった」(10「知井坂越え小浜・海津

い。『ねえ小唄』は嫌だが、ジャズを、馬鹿げたものだとは言ってしまう
えない。我々の生活がそのなかに表現されている。喜びも悲しみも諦め
も希望も。…」(46「風雲急とホットジャズ」, p.139) とジャズ音楽に
開眼して以来、ジャズへの思い入れも相当なものだ。これに対して、今
引用した文章にも見られるように、当時の庶民の間に浸透していた流行
歌は、「最近、胸がわるくなるような流行歌が流行している。いやに退
廃的な調子で、『忘れちゃ嫌ぁンよ』」(16「中尾の叔父と富野の叔
父」, p.58) といった具合で、中野さんの肌には合わなかったようだ⁶⁾。

(10) 民俗的なものへの興味関心

中野さんは民俗的なもののこういったところに関心を持っていたのだ
らうか。ここでは、便宜上、史学会関係としきたり関係とにわけて見て

第16表 《民俗的なものへの興味関心》への言及のある小見出し一覧

◇ 1「茶話会」(1) pp.8-10	◇ 2「三井寺の鐘」(2) p.15
◇ 3「ポップンと花火」(5) pp.45-46	• 4「父の講演」(5) p.50
• 5「季節は初夏」(5) p.55	• 6「中尾の叔父と富野の叔父」(5) pp.57-58
◇ 7「人力車」(5) p.59	◇ 8「試験の終り」(5) pp.59-60
◇ 9「母の兄中尾万三の死」(7) pp.70 -76	◇10「知井坂越え小浜・海津の旅」(7) pp.76-83
◇11「平岡万珠堂の売出し」(8) pp.90 -91	• 12「巨椋池」(10) pp.110-113
• 13「お火焚」(10) p.113	◇14「正月十五日」(10) pp.115-116
◇15「史学会の初瀬・大將軍山・伊那佐 山行」(10) pp.121-127	• 16「井上先生と」(10) pp.130-131
• 17「木曾福島から白川郷への旅」(11) pp.141-143	◇18「旅の野帳風メモ」(11) pp.143-146
• 19「もうひとつ葉書」(11) p.150	◎20「奥大原行」(12) pp.157-164
◇21「記憶の信頼性」(12) pp.164-166	◇22「参禅」(13) pp.167-170
◇23「コドモシ」(16) pp.191-192	◇24「白蛇」(16) pp.196-197
◇25「兄の応召」(16) pp.199	◇26「菅平行」(17) pp.210-212
• 27「あまけ」(18) p.224	• 28「コトハジメ」(19) p.236
◇29「愛称的敬語」(19) p.238	◇30「ヒバヤな年」(19) pp.240-241

- (46) s.12. 7. 8 [ホットジャズ vs. 『ねえ小唄』は嫌 (p.139)]
- (48) s.12. 7.23 [《レコードにて二、三年前のJ・O映画の主題歌きこゆるも…》
(p.145)]
- (52) s.13. 1. 7 [《『オーケストラの少女』という映画…こんなに美しい音楽に
みちあふれた映画…ストコフスキーの指揮ぶり》(p.171)]
- (53) s.13. 2.26 [《二階へ上がって歌い出す。あはれゆかしき、うたのしらべ…
ララララ、ラララ…》(p.173)]
- (54) s.13. 3. 5 [幼稚園の夢の中で《オヤマノオサルハ、マリガスキ、トント
ンマリツキャオドリダスという歌を習った、頬っぺたの赤い先
生だ。》(p.173)]
- (55) s.13. 3. 7 [夢の中で《立琴の音す》(p.175)]
- (57) s.13.3/4.x [おたけどんへの手紙のくだりに《セルロイドの小さいレコー
ドに合わせて童謡を歌ったり…》(p.186)]
- (61) s.13. 5.24 [《朝日の感触にふさわしいボーイソプラノが…火ノ見まで聞こ
えてくる》(p.198)]
- (63) s.13. 6.14 [《遠くから不思議な響き…古い日本の調べ。/ 尺八…》(p.206)]
- (66) s.13. 7.11 [《横笛の音…ここは御国を何百里の旋律》(p.212)]
- (68a) s.13. 8. 6 [《[お隣の]ピアノがホルンに変わった。…正雄さんがベートー
ベンの第九のレコードをかけてホルンの稽古をしている》
(p.220)]
- (68b) s.13. 8.12 [《夜、久留島へ行き[ベートーベン]第九のレコードを全曲かけ
てから帰る》(p.220)]
- § (71a) s.13. 9.6? [《『一五夜お月さん、ごきげんよう』と、幼い頃の歌を歌う》
(p.223)]
- (71b) s.13. 9.7? [《今夜もお月夜。こんな夜こそショパンを聞く夜だ》(p.224)]
- (75) s.13.10.27 [《漢口陥落の公表…ラジオは引続き愛国行進曲を奏し始めた》
(p.229)]
- (76) s.13.11. 1 [《アトラクションとして[の]ジャズの実演》(p.229)]

☆ (3)などの数字は、第10表の小見出し番号を、また<s.11. 3. 5>などは年月日（この場合は<昭和11年3月5日>）を示す。

§ <(71a) s.13. 9.6?>の末尾の?は、『中学生』からは日付が確定できないことを示す。

時局高揚歌、なつかしさを喚起してくる童謡、古い日本の調べ、宝塚のミュージカル（ただしこれは、姉の趣味と言った方が正確）等など、非常なバラエティーに満ちているということだ。特に中野さんが熱を入れていたのはクラシックのようだが、「ホットジャズが聞こえる。暖かいが何か淋しいメロディ。…僕はもはやジャズを…けなすことはできな

第15表 『中学生』に出てくる音楽情報一覧（本文登場順）

-
- ☆(3) s.11. 3. 5 [《姉、…ズカ(宝塚少女歌劇)の歌を…歌っている》(p.28)]
 - (4) s.11. 3.10 [《…ミニユエットとソナタ、ハ長調のレコードをかける》(p.31)]
 - (8) s.11. 4. 3 [《『今宵この森に』…『ZUKA でもいいから』という父…『ミュージック・アルバム』の主題歌『春の歌』…津の叔父が満州国国歌…》(pp.37-38)]
 - (10a) s.11. 5. 9 [《明ちゃんは朝日会館へ、フォイアマン氏のチェロ独奏を聞きに行った。…》(p.46)]
 - (10b) s.11. 5.13 [《夜、散髪屋で《八時より半時間、エマヌエル・フォイヤマン氏のチェロの放送を聞きながら、先客の終わるのを待つ》(p.46)]
 - (10c) s.11. 5.13 [《[ラジオで] チェロはサラサーテの何とかいう曲をやっている》(p.47)]
 - (12) s.11. 5.17 [《音楽部の、…三年前からと同じ曲の音》(p.54)]
 - (16) s.11. 5.28 [《胸がわるくなるような流行歌…『忘れちゃ嫌よ』》(p.58)]
 - (17) s.11. 5.30 [《ラジオでの音楽放送—《夜七時五十五分よりニコライ・シヘルブラット指揮の新響の放送、ルービン・ゴールドマルク作曲『ニグロ狂詩曲』、…》(p.58)]
 - (18) s.11. 5.31 [《夜、テイボウの放送、シュマノフスキーの『アルトゥズの泉』が非常に美しい。》(p.59)]
 - (19) s.11. 6. 1 [《工事場で人夫の歌う声》(p.60)]
 - (24a) s.11. 6.22 [《洋楽の放送…遥かにカフェー(から)かすかに聞こえるだけ》(p.68)]
 - (24b) s.11. 6.23 [《山国隊のピーヒョーリヒョ…》(p.68)]
 - (34) s.11.12. 5 [《盛口ッァン(古い通い番頭)がよく歌った歌が涙のこぼれるような現実の姿となって僕の前にある》(p.112)]
 - (36) s.11.12.22 [《『焚け焚け、お火焚き、ノォ、ノォ。みかん・まんじゅ、ほしや、ノォ、ノォ』と歌うのが恒例…》(p.113)]
 - (39) s.12. 2.25 [《映画の中で《一同がそろって歌い出したのは、『ここにお国を何百里』の歌だ》(p.119)]
 - (40) s.12. 3. 7 [《浩の机の上に軍歌集…なつかしい思い出の『青葉しげれる桜井の』があった。》(p.121)]
 - (41) s.12. 4. 8 [《ティー・パーティーの場で《皆が輪になってホーム・スイート・ホームをハミングで歌った。》(p.128)]
 - (45a) s.12. 6.18 [《明ちゃんが病気で、…ワインガルトナーの演奏会に行けなくなった…》(p.135)]
 - (45b) s.12. 6.20 [《夜、ワインガルトナー夫妻の演奏会へ父と二人で行く。…》(p.136)]
 - (45c) s.12. 6.22 [《夜、ワインガルトナーの『第五』の放送あり、…》(p.136)]

万を突破，その約2年後の昭和12年5月8日には300万を突破という記録が残っている（日本放送協会編 [1977 a: p. 3, p. 37, pp. 50–62]; 日本放送協会編 [1977 b: p. 666, p. 673, p. 677]）。こうして見てくると，昭和10年代の前半というのは《入ってくるメディア》としてのラジオの重要性がより一層充実しつつあった局面とすることができるだろう。

こうした局面でラジオから中野さんの耳に入ってくるもの，もしくはラジオで中野さんが聞いているものということ言えば，教養番組や音楽番組だけでなく，その他にも，小鳥の鳴き声（15「学期末試験前」，p. 56）や臨時ニュース（42「新四年生の四月」，p. 128），野球中継（68「東京の鈴木の家で」，p. 219）などさまざまである。そしてここで臨時ニュースの形で中野さんが聞いているのは，当時日本中を興奮のるつばに巻き込んでいた「朝日新聞社の訪欧機『神風』号のロンドン安着」の知らせである⁴⁾。

他方，《接近していくメディア》の観点からラジオ接触を見てみると，中野さんが積極的に耳を傾けているのは，「夜七時五十五分よりニコライ・シヘルブラット指揮の新響の放送，ルービン・ゴールドマルク作曲『ニグロ狂詩曲』，ニグロ聖歌の旋律による大陸的，原始宗教的な美しい曲だ。ドボルザークの弟子だという」（17「万葉集」，p. 58），「夜，テイボウの放送，シュマノフスキーの『アルトゥズの泉』が非常に美しい。…」（18「試験の終り」，p. 59），「夜，ワインガルトナーの『第五』の放送あり，『第五』の良さをしみじみ知らせてもらえた気がする」（45「明ちゃんの結核」，p. 136）といった具合に西洋音楽である⁵⁾。

そこで今度は，第15表をてがかりにして，中野さんの音楽とのつきあい方の特徴を簡単に見ておくことにしよう。この表をながめていてすぐ気づくことは，ラジオに劣らず音楽が《入ってくるメディア》としての機能を持っているということ，しかも中野さんが楽しみながら接触している音楽の種類が，クラシック，映画がらみのもの，ジャズ，軍歌や

登場するというのだから、中野さんが聞き耳を立てるようにラジオに聞き入るといいうのも頷ける。しかし、ラジオ接触の仕方では圧倒的に多いのは、「八時より半時間、エマヌエル・フォイヤマン氏のチェロの放送を聞きながら、先客の終わるのを待つ」（夜、散髪屋での話 [10「音楽と散髪」, p.46]）といった具合にラジオから聞こえてくる場合のようだ。例えば「散髪してもらいながら洋楽の放送を聞こうとしたのに、散髪屋のラジオは故障で、遥かにカフェー [『一声』] でならしているのが、かすかに聞こえるだけだった」（24「短いメモ群」, p.68）とか「丸山公園の凱旋祝賀式を、店のラジオが中継していると、…」(同, p.68) といったようにラジオの音につつまれているといった感じで、日常空間の中での“自然な”文化環境としてラジオは機能していたと見ることができそうである。

だが、《時代の流れの中でのラジオ》という観点から昭和10年代前半におけるラジオの普及度がどういう局面にあったのかという観点から若干調べてみると、こうした《入ってくるメディア》的ラジオの機能の仕方は意外に新しいものであることがわかる。というのは、「JOAK, JOAK, こちらは東京放送局であります。…」というラジオの第一声が聞こえてきたのは、実はほんの10数年前の大正14年（1925）3月22日午前9時30分のことだし、全国放送網が東京・名古屋・大阪・札幌・仙台・熊本・広島の7局体制の形で整備されるのは昭和3年11月5日のことなのだから。「ラジオの紹介・宣伝と、受信障害の除去や故障の修理に当たる『ラジオ相談所』の活動」を2本の柱とするラジオ普及運動や昭和の初めの頃から活発化した「電灯線から電源をとるエリミネーター（交流）式受信機」の普及、それに実況中継・ラジオドラマ・時局放送・ラジオ体操・「子供の時間」の全国放送等などのさまざまな「番組創造への努力」——こうしたラジオ普及に向けての働きかけも手伝って、大正14年3月の開局当初3500でスタートした聴取契約数は昭和7年2月16日100万の大台にのっている。そして昭和10年4月9日には200

最後は、中野さんの『オーケストラの少女』の見方の特異性である。中野さんはすでに昭和13年1月7日、——ということはつまり、この映画の続映が決まった第2週の2日目に——東京に立ち寄った時に『オーケストラの少女』を見ていたのだが、よっぽどこの映画が気に入ったらしく、その後も何度も映画館に通っている。そして、高校不合格が判明した同年3月29日付けの日記には「京宝で『オーケストラの少女』を見る。五回目だ」(46「谷井伯父死去と高校不合格」, p.190)と書き記している。そこでは高校不合格の結果、「うさはらしの映画館行き」(p.190)という導入の仕方を中野さん自身はしているしそういう側面があったことは否定しないが、この熱の入れようには、単なるうさはらし以上のものを感じさせられる。この中野さんの思い入れの激しさの中身を探る上でヒントを与えてくれているのではないかと思われるのは、次のような一映画評論家の発言である。「『オーケストラの少女』は見てゐて唯だもう嬉しく楽しかった。見てゐたら嬉しくなつて幾度も涙が出て来た。…人生は愉しい、世の中を皆でよくして行かなければならないと、この映畫を見て再び考へた。…みんなが良いことをしよう、楽しく良く暮らさうといふ映畫全體の感じは非常に嬉しくなつた」(No. 667: pp.108-109)。

(C) ラジオと音楽の場合

中野さんの場合、ラジオを通じての音楽との接触というケースもよく見られる。この事情を踏まえて、ここでは、まずはじめにラジオ、次いで音楽という順で接触のありようを見ていくことにする。

中野さんはどういったラジオ接触の仕方をしていたのだろうか。まず意識的にラジオに耳を傾けている場合から見ておくと、ファウストのラジオ解説の場合があげられる(1「弟の誕生日と書籍購入」, p.14)。本のセクションの一つの話題として、中野さんにとってゲータが重要な存在であることについてはすでに触れておいたが、そのゲータがラジオに

『中学生のみた昭和十年代』と個人生活史研究
映画の紹介のされ方である。さらに、京都座で見た『大阪夏の陣』については、「カメラ、構図、非常に美しい。ただ画面が変わるとき全体の色の調子が濃くなったり淡くなったりするのが時々気になる。…」(35「新四年生の四月」, p.129)と、色彩や構図について、これまたかなり細かいコメントをしている。

第2は、映画のことをとにかくよく知っており、批評家らしいコメントの姿勢をすでに身につけているということである。例えば『モロッコ』で見ると、「ゲーリー・クーパーとディートリッヒの、スタンバーク監督、『モロッコ』。思い出の名画週間で見に行く。四年前公開された映画だ。僕は初見参。外人部隊ものの先駆けで最優秀映画だと言う…」(43「モロッコ」, p.155)といった具合で紹介の仕方がいかにも堂に入っているし、松竹座で見たという『舞踏会の手帳』の場合だと、「特別公開三日間で、秋まで上映されない、入場料一円、そのうえ税が十銭かかる[これが先に触れた入場税である(引用者)]。フランス劇壇の名優がずらりと並んで出演。名監督デヴィヴェのオリジナル・シナリオによる作品だ。ヴェニス映画コンクールでムッソリーニ賞を獲得したのもむべなるかなと思われる傑作だ。」(52「舞踏会の手帳」, pp.207-208)といかにも情報通のコメントが並んだ後に、「…芸術の香り高い工芸品、そしてあくまでこれは詩である」(p.208)という感想がなされている。

第3は、入れ込んだ、もしくは引きつけた見方をする時が見られることだ。例えば映画『蒼氓』については、「ブラジル移民の…移民館生活の現実的な描写。日本にこんな優れた映画が出来るとは知らなかった。…一緒に見に行った…上の中野…の伯母さんの気持ちを察しただけでも、涙が出て来る」(34「映画『蒼氓』」, p.119)と、簡潔な内容把握に続けてかなり入れ込んだ感想を表明しているし、『路傍の石』についても「涙ぼろぼろ…みんなお母さんのことだ」(60「路傍の石」, p.224)といった具合である。

されている映画 22 本（中野さんが見ているものでは 20 本）のうち実に 13 本が総決算で論評されるに値する映画として登場していること自体に目をみはらされる。

こうして見てくると、中野さんは、限られた小遣いをはたいて当時の映画の中では映画評論家たちがいろいろな意味で一押し二押しという形で推薦していた非常に評価の高い映画か非常な話題を集めていた映画に的を絞って見ていたということがわかるはずである。

(B3) 中野さんの映画の受けとめ方について

ここでは、中野さんの映画とのつきあい方の特徴を描き出すという観点から中野さんの映画の受けとめ方という点で際立っていると思われる点を 4 つほど指摘しておきたい。

まず第 1 は、音、色彩、構図などについて中野さんは相当細かい観察力を持っているということである。例えば音や音楽についての発言を拾ってみると、「最初のカットで雨垂れの音が大き過ぎる。…」(京宝で見た『我輩は猫』についてのコメント [12「季節は初夏」, p.54]) とか「こんなに美しい音楽にみちあふれた映画が、かつてあったろうか。ストコフスキーの指揮ぶりを見ていると、我々の顔はほころび、握りしめたこぶしは踊った」(東京で見た『オーケストラの少女』についてのコメント [45「昭和十三年正月」, p.171]) といった具合である。色彩については、映画『丘の一本松』について、「[これは]野外で撮影された最初のテクニカラー映画。『ペギー・シャープ』のような目の疲れる濃い色のみではなく、困難とされていた薄い色も出る。」(24「最初の野外撮影の映画」, pp. 88-89) とかなり観察が細かい。ちなみに、『キネマ旬報』をめぐってみても、「野外で撮影された最初のテクニカラー映画」(「外国映画紹介: 丘の一本松」の解説での表現 [No. 584: p. 33]) とか「野外テクニカラーとして最初のもの」(「主要外国映画批評: 丘の一本松」の書き出しの言い回し [No. 589: p. 69]) といったところがこの

同名の舞台劇を映画化したもので、映画版では「野心と希望に燃え立つ女優志願の若い娘達が日夜をすごす」(No.667: p.130) ニューヨークのとある一下宿を中心にして繰り広げられる生活模様が描き出されている。「各社試寫室より:ステージ・ドア」によれば、カウフマン演出の舞台劇自体は、ニューヨークのミュージック・ボックス座で1936年10月22日から21週間のロングランが打たれて大成功を収めたものだが、舞台劇と映画との対比で面白いところは、「ハリウッド嫌ひのカウフマンが、ハリウッドに對する諷刺と皮肉とを盛込んだ」舞台劇が換骨奪胎されて、ほかならぬ「ブロードウェイ演劇に對する諷刺と嘲罵」の趣をもったものとなっている点であろう(No.672: p.45)。次に、「マルコ・ポーロ」は「オペラ・ハット」でも好演したゲイリー・クーパー主演映画で、「一九三九年總決算」では「ゲイリー・クーパーをマルコ・ポーロに扮させ、新星シグリッド・ギューリーを支那の王女に仕立てたゴールドウインの御趣味映畫」(No.702: p.45)とあるが、内容的には「十三世紀の支那に於ける伊太利人ポーロの華やかな戀愛と冒険の活劇映畫」(No.675: p.49)である。興行的には、「純然たる娛樂映畫」として第一級だったようで、「外国映画批評:マルコ・ポーロの冒険」では「一般大衆向きのものとしてこの映畫に比する興行價を有するものはザラにあるものではない」(No.677: p.52)と太鼓判を押されている。最後は「望郷」である。この映画もまた例のジュリアン・デュヴィヴィエ監督作品なのだが、中野さんが見た順序とは逆で、実は先に紹介した「舞踏會の手帖」の前に作られたものである。「外国映画批評:望郷」での内容紹介によれば、当時フランスの植民地であった「アルジェリアの首都にあるカスパといふ迷宮街のやくざの顔役を主人公とし、その男と巴里から見物にきたガビイといふ女との戀を主流にした」「上質のメロドラマ」(No.673: p.71)だと言う。

以上、中野さんの見ていた映画が各年の總決算の中でどのように扱われていたのかを個別的に確認してきたわけだが、『中学生』の中で言及

ることを承諾した」(No.644: p.6) といった話が『『舞踏會の手帖』合評』にのっているところからも伺うことができる。最後にアメリカ映画のセクションの冒頭近くでは、『『オーケストラの少女』が第一』(No.667: p.108) という発言が飛び出してくる。この映画はディアナ・ダービン主演、ストコフスキー共演で「外国映画批評:オーケストラの少女」では、「清純の香に溢れ、而も興趣極りなき音楽映畫」(No.634: p.51) として紹介されている。昭和13年1月11日号の「映画館景況調査:丸の内」によると、昭和12年の年末(12月29日)に「一本立一圓均一といふ思ひ切った新年興業」に踏み切ったこの映画は、「[正月]三日の日に遂に九千圓臺と云ふ輝やかなしいレコードを作った。蓋し全東京映畫館十三年度正月景氣の王座を行くものであらう。」と言われるほど盛況で、「[正月]五日までの豫定の八日間に五萬五千圓を計上して、十一日迄六日間日延べするといふ凄いい好調を示した。」と記されている(No.633: p.105)。その次の昭和13年1月21日号でも「封切館の一圓均一本立興業は大成功で連続三週といふ凄いい景氣」(No.634: p.51) が続いており、業界セクションでの総決算でその記録的な人気のほどを総括的に再確認しておくとして「今年度洋畫界話題獨占の人気者は『オーケストラの少女』だ。その飽くなき頑強さは全く興行價値の常軌を超越した。」とか「日比谷で正月ロードショウ三週間、三月日劇で廿日間、次いで又も日比谷で三週間、更らに九月にまた一週間で遂に丸の内十週續映の記録をつくった。のみならず東京では一流洋畫館で『オーケストラ』を上映しない館はないと云つてもいいだらう」ということになる(No.667: p.118)。

『中学生』の中で言及されている映画で「一九三九年總決算」に顔を出してくるのは、「海賊」、「ステージ・ドア」、「マルコ・ポーロ」、「望郷」の4本である。「海賊」の紹介は「セシル・デミル老の見世物映畫」(No.702: p.44) といったところでいたって簡単なものである。「ステージ・ドア」は、ジョージ・S・カウフマンとエドナ・ファーバーの合作になる

例の外国映画の輸入禁止の影響が「一九三八年の外〔国映〕畫は輸入統制の爲に、十一月まで全然輸入を見なかつたので、…目星しいものも五六本しかないやうな有様である」(No.667: p.104)と大きく取り上げられているのが目を引く。そしてこうした厳しい状況における注目作は何か、という話の流れの中で最初に出てくるのがイタリアのカルミネ・ガローネ監督作品の「シピオネ」——「『シピオネ』合評」での紹介によると「第二ポエニ戦役を背景として居る歴史劇」(No.650: p.55)——なのである。この映画の評判はと言うと、「イタリーの誇る傳統たる歴史映畫の大作…歴史の再現…國策映畫…イタリーの民族精神と傳統との現はれ」(No.667: p.105)であり「凡そイタリー映畫として十數年來のスペクタクル歴史映畫、そして恐らくイタリー最大の映畫だらう」(No.667: p.105)といった具合である。「『シピオネ』合評」でも、この映画は「形から云へば昔のイタリーの歴史映畫の本道に沿つて居る。そして内容からいへば現在の國策に沿つて居る。」(No.650: p.56)と位置づけられているものだ。次にフランス映画のセクションにくると、「フランスでは『舞踏會の手帖』。『舞踏會の手帖』はデュヴィヴィエが初めて自分一人で原作を書いた映畫だ」(No.667: p.106)という取り上げ方がされている。「矢張りこれはフランス映畫ではベスト・ワンぢやないですか」とか「僕は今年〔=昭和13年〕で見た映畫の中で一番面白かつた。…僕の考へでは、クリスチーナといふ女はデュヴィヴィエの久遠の女性だと思ふ」(No.667: pp.106-107)といったところが批評家たちの評価である。ここで「舞踏會の手帖」と言われているのは、30代半ばで未亡人になってしまったクリスチーナという女性が20年前に「初めて舞踏會に出た折の、ダンス相手の男の名を書き記したもの」(No.644: p.47)で、その時出会った10人の若者たちのその後を知りたくなって訪ね歩くというストーリー設定になっている。この当時ジュリアン・デュヴィヴィエが監督としての全盛を極めていたらしいことは、「フランス一流の名優が顔を揃へてデュヴィヴィエのシナリオで直ぐ出演す

評されているのは、「路傍の石」,「冬の宿」,「シピオネ」,「舞踏會の手帖」,「オーケストラの少女」の5本である。

日本映画の総決算のセクションでは、現代劇映画の動向として「去年 [=昭和12年] あたりからの傾向」という形で、ここでも「純文學の映畫化といふ問題」が触れられ (No.667: p.95), その典型として「路傍の石」が注目されている。しかしこの映画が評価されるのはそうした脈絡でだけではないことは、「今年の現代映畫の第一等の仕事…日活では…『路傍の石』…東京發聲で…『冬の宿』」(No.667: p.97) といった言われ方や (ちなみに「冬の宿」についてのコメントはここでだけというわけではないが、この評価が主要なものである), 「僕は今年の現代物の中では『路傍の石』が凡ゆる意味で一番いいと思ふ」(No.667: p.97) といった発言からも明らかである。「『路傍の石』合評」でも、外国映画輸入禁止という状況の中で「待望されてゐた映畫の一つ」としての期待に違わず、「今年の日本映畫の中でも一番いい寫真位に僕は買つて居るのだ」といった絶賛のされ方をしている (No.655: p.4)。「路傍の石」は文部省と日活多摩川の共同制作になる作品だが、「田坂具隆のやうな日活の上昇期の作家に [監督を] やらしたといふことと, [朝日新聞連載の山本有三の] 原作がよかつたといふことと, まだ多摩川に残つてゐる機構のよさといふことと, その三つに依つてこの教化映畫が成功したのだ」(No.655: p.4) と「『路傍の石』合評」では総括されている。実際、田坂具隆という人は、この当時厳しい時代状況の中にあつたにもかかわらず、『キネマ旬報』の昭和13年度の国内映画ベストテン第1位に輝いた話題の戦争映画「五人の斥候兵」を初めとしていくつもの優れた作品を作り出していた監督である。「日本映画批評:路傍の石」に「封切二週續映。作品の眞面目さと觀客の嗜好の向上とが合致して好評」(No.657: p.73) とあるから、興行的にも成功を収めていたことがわかる。

他方、外国映画の総決算にあたっては、まず論評の前提的発言として

『中学生のみた昭和十年代』と個人生活史研究
京都座の方)、「陽春第一週の白熱戦を展開した」のが功を奏した結果、
同じ週に「背水の陣」の意気込みで帝國館で上映された「丹下左膳」他
3本立も「『夏の陣』の前には齒が立たず」と言われる始末だったよう
だ。

次に石川達三原作で昭和10年上半期の第1回芥川賞を受賞した「蒼氓」(文藝春秋 [1995: p. 320])は、「移民收容所内に於ける移民の生活を描いたもの」(No. 603: p. 104)だが、映画「蒼氓」はこれをかなり意識的に記録映画的色彩を持つように日記風に作り上げたものである。この映画は、「我輩は猫である」や「路傍の石」と同じく(また同時代のその他の作品をあげておけば「眞實一路」や「若い人」などもそうだが)、文芸物もしくは純文学の映画化傾向を体現したものだが、「三七年度總決算」では「今年の現代映畫はどうだったか。…『蒼氓』『裸の町』…それ位が第一級の作品だらう」(No. 632: p. 69)とか「日活には…『蒼氓』がある…質から云へば一番いいものがあった」(No. 632: p. 76)とまで言われるほどの高い評価を得ている。また、監督の熊谷久虎と原作者の石川達三の2人を招いて文学と映画との関係や「個性と社會性」という問題などについて真摯なやりとりをしていて刺激的な「映畫『蒼氓』を語る」でも、「この映畫は今年の日本トーキーのうちでは、少くとも今日まで見たもののなかの最優秀作に違ひない」とか「アメリカ映畫にも此の程度まで出来てる作品は殆ど無い」といった発言で締めくくられている(No. 601: p. 13, p. 16)。全体として鋭い指摘に満ちあふれた「主要日本映畫批評：蒼氓」に見られる印象的なコメントとしては、「[原作に比べて]映畫『蒼氓』に於ける集團の方が遙にヴィヴィッドな印象としてのしかかつてきた」というのがあるが、この映画がこうした非常に高い評価を得た理由の一端は、「『海外雄飛』なる言葉の半面が持つ人生的意味をかなり如實に描いた映畫」に仕上がっていたあたりにもあったようだ(No. 603: p. 104)。

『中学生』の中に出てくる映画で〈昭和十三年度映畫界總決算〉で論

昭和12年4月の封切主要映画としてあげられている「大阪夏の陣」とその2カ月前の同年2月に封切られた「蒼氓」の2つである (No.632: p.88)。

すでに先でこの当時《現代映画の流行／時代映画の衰退》という傾向が顕著なことは触れておいたが、この「総決算」の座談会でも、まず初めに「去年 [=昭和11年] と今年 [=昭和12年] を通じて…殆どベストテンの八割までが現代映畫である」といった発言がなされた後に、「大阪夏の陣」について、「今年 [=1937年] の [時代]映畫で [例外的にベストテンの中に] 入れるとしたら、…『大阪夏の陣』だと思ふ」という形で紹介されている (No.632: p.68)。「松竹ブロックを總動員し、劇團の應援を得て一年餘の日時を費した大作」(「日本映画紹介:大阪夏の陣」の解説での表現 [No.606: p.182]) で人と金とを注ぎ込んだこの映画については、「『大阪夏の陣』を作るのがせいぜい日本の資本力である」(No.632: p.71) とか「『大阪夏の陣』の頑張りは偉いが、あれだけ金を掛け、日数を掛けた割りには…」(No.632: p.74) といった声も見られはするが、より有力な意見は「[『大阪夏の陣』ほどの] スペクトルものは今までの日本映畫になかった。」(No.632: p.74) とか「大衆を吸引する時代映畫は『大阪夏の陣』一本だ」(No.632: p.68) などであって、中には「衣笠貞之助の『大坂夏の陣』…われわれの批評対象となるのは衣笠作品一本だね。」(No.632: p.74) とまで言い切るほどの評者も見られるほどなのである。「『大坂夏の陣』のヒット」という副題を持つ「春の興行展望」(No.608: p.42) でも、「邦畫封切館で二週續映」という勢いをもったこの映画は、興行面でも久々の大ヒットだったらしく、例えば東京と横浜では「東京 SY 三館、東京・横濱直營五館」で封切られ、「邦・洋双方の觀客を迎へ盡くした觀のある廣汎なる大衆性」を獲得したと評されている。そして「映画館景況調査:京都」(No.608: p.43) によれば、中野さんが見た京都でも松竹座と京都座の両封切館が昭和12年4月1日から同時に上映して (中野さんが入ったのは

『中学生のみた昭和十年代』と個人生活史研究
「タの丘」の評判なのだが (No. 597: p. 65), 「主要外国映画批評: ゴルゴ
タの丘」の中でも「耶穌を題材とした映画としては、最高の作品と言ふこ
とが出来ると」(No. 596, p. 63) という評価を与えられており、興行的に
も「ファンにはデュヴィヴィエ作品として吸引力を持ってゐる」(No.
596, p. 63) となかなか好調だったらしいことがうかがえる。ちなみに、
この〈吸引力〉という表現の仕方は、例えば「『丘の一本松』につ
いての論評で」はじめて作られた野外天然色映画と言ふのが何よりの吸
引力である」(No. 589: p. 69) とか「『モロッコ』のパ [=パラマウン
ト] 社古物上映が相變はず底知れぬ吸引力を發揮してゐる」(No. 623:
p. 114) といった具合に、この当時非常に頻繁に使われていたものであ
る。

次に米国映画検閲局のベスト・テン第 1 位で昭和 11 年 5 月に封切ら
れた「オペラ・ハット」に移ると (No. 632: p. 88; No. 597: p. 80), ア
メリカ映画のセクションでは「アメリカ物では、先づフランク・キャプ
ラの『オペラ・ハット』」と一人の評者が言えば、別の評者が「アメリ
カ物では『オペラ・ハット』が」本年第一の作品だ」と続くといった具
合で評者たちの評価が一致している (No. 597: p. 68)。「現在のアメリ
カの映画製作の組織の中で一番良心的に出来、藝術的に優れた作品だ
と思ふ…同時に興行的にも成功して居る」(No. 597: p. 68) というのがこ
の映画の総合的評価と言つていいものだが、同年の業界部門の総決算の
セクションでも昭和十一年度の外国映画封切りの中では、「最高の稼ぎ
高は矢張り『オペラ・ハット』」(No. 597: p. 79) となっている。また
「主要外国映画批評: オペラ・ハット」では、「最近のアメリカ映画として
は、第一級の作品。娯楽価値〔が〕豊富」な「オペラ・ハット」は「米國
流メロドラマ映画作者としてのキャプラ・リスキン二人組」の手になる
もので、「この映画の最大の成功は、主演者に〔ゲイリー・〕クーパー
を得たことである」と述べられている (No. 578: p. 57)。

翌年の「三七年度総決算」の日本映画のセクションに出てくるのは、

No.660:s.13.10.11. pp.7-8	<「綴方教室」と「路傍の石」>
No.660:s.13.10.11. p.59	<日本映画紹介：続水戸黄門廻國記>
No.661:s.13.10.21. pp.88-89	<映画館景況調査：京都：?>
No.664:s.13.11.21. p.78	<日本映画批評：冬の宿>
No.664:s.13.11.21. p.102	<映画館景況調査：京都：冬の宿；エノケンの大陸突進後篇>
No.667:s.14. 1. 1. p.130	<外国映画紹介：ステージ・ドア>
No.667:s.14. 1. 1. pp.143-146	<「望郷」合評>
No.672:s.14. 2.21. p.41	<外国映画紹介：マルコ・ポーロの冒険>
No.672:s.14. 2.21. p.45	<各社試寫室より：ステージ・ドア>
No.673:s.14. 3. 1. p.71	<外国映画批評：望郷>
No.674:s.14. 3.11. p.107	<映画館景況調査：京都：望郷>
No.675:s.14. 3.21. p.49	<各社試寫室より：マルコ・ポーロの冒険>
No.677:s.14. 4.11. p.52	<外国映画批評：マルコ・ポーロの冒険>
No.678:s.14. 4.21. p.104	<映画館景況調査：京都：マルコ・ポーロ；望郷>

☆ まず<No.573:s.11. 4.21.>とあるのは、『キネマ旬報』の通し番号（573号）と昭和11年4月21日号であることを、また次の<p.112>は記事がのっている頁数（112頁）を示している。その次の<日本映画紹介：我輩は猫である>は、紹介セクションの表題と映画タイトルである。

という特別のセクションで扱われているし、『蒼氓』は「映画『蒼氓』を語る」という特別座談会での取り扱いになっているのである。

最後の第3の観点は、『キネマ旬報』での毎年の総決算の中での言及のされ方である。ここでは、総決算の中身の紹介を中心に据えることにするが、第14表のもとになった記事内容やその他関連がありそうな情報については追加的に組み込んでくることにしたい。

「一九三六年総決算」の外国部門の座談会では「ゴルゴタの丘」と「オペラ・ハット」が触れられている。

まずフランス映画のセクションの冒頭近くには、「フランスで一等多くの作品を見せてくれたのはジュリアン・デュヴィヴィエ」の作品だという文章があって、その一つとして「ゴルゴタの丘」が顔を出している（No. 597: p.65）。「宗教的ページェント映畫として優れたもの」とか「兎に角キリストを扱った映畫の中では最高だね」といったところが「ゴルゴ

第14表 『中学生』に出てくる映画タイトル関連情報を『キネマ旬報』に探る

☆No.573:s.11. 4.21. p.112	<日本映画紹介:我輩は猫である>
No.574:s.11. 5. 1. pp.61-62	<各社試写室より:オペラ・ハット>
No.575:s.11. 5.11. p.39	<外国映画紹介:オペラ・ハット>
No.575:s.11. 5.11. p.110	<主要日本映画批評:我輩は猫である>
No.577:s.11. 6. 1. p.35	<映画館景況調査:京都:我輩は猫である>
No.578:s.11. 6.11. pp.34-35	<映画館景況調査:京都:オペラ・ハット>
No.578:s.11. 6.11. p.57	<主要外国映画批評:オペラ・ハット>
No.584:s.11. 8.11. pp.32-33	<外国映画紹介:丘の一本松>
No.589:s.11.10. 1. pp.32-33	<映画館景況調査:京都:丘の一本松>
No.589:s.11.10. 1. p.69	<主要外国映画批評:丘の一本松>
No.591:s.11.10.21. pp.48-49	<外国映画紹介:ゴルゴタの丘>
No.591:s.11.10.21. pp.65	<各社試写室より:ゴルゴタの丘>
No.596:s.11.12.11. p.63	<主要外国映画批評:ゴルゴタの丘>
No.597:s.12. 1. 1. p.107	<映画館景況調査:京都:ゴルゴタの丘>
No.601:s.12. 2.11. pp.12-16	<映畫『蒼氓』を語る>
No.603:s.12. 3. 1. p.104	<主要日本映画批評:蒼氓>
No.604:s.12. 3.11. p.45	<映画館景況調査:京都:蒼氓>
No.606:s.12. 4. 1. p.182	<日本映画紹介:大阪夏の陣>
No.608:s.12. 4.21. p.43	<映画館景況調査:京都:大阪夏の陣>
No.608:s.12. 4.21. p.107	<主要日本映画批評:大阪夏の陣>
No.623:s.12. 9.21. p.114	<映画館景況調査:京都:モロッコ>
No.632:s.13. 1. 1. p.110	<外国映画紹介:オーケストラの少女>
No.633:s.13. 1.11. p.105	<映画館景況調査:丸の内:オーケストラの少女>
No.634:s.13. 1.21. p.51	<外国映画批評:オーケストラの少女>
No.642:s.13. 4.11. p.132	<映画館景況調査:京都:オーケストラの少女>
No.644:s.13. 5. 1. pp.6-10	<「舞踏會の手帖」合評>
No.644:s.13. 5. 1. p.47	<外国映画紹介:舞踏會の手帖>
No.644:s.13. 5. 1. p.89	<日本映画紹介:路傍の石>
No.650:s.13. 7. 1. pp.55-58	<「シピオネ」合評>
No.650:s.13. 7. 1. p.73	<外国映画紹介:シピオネ>
No.650:s.13. 7. 1. pp.85-86	<外国映画批評:舞踏會の手帖>
No.651:s.13. 7.11. pp.98-99	<映画館景況調査:京都:舞踏會の手帖>
No.655:s.13. 8.21. pp.4-8	<「路傍の石」合評>
No.657:s.13. 9.11. p.45	<外国映画批評:シピオネ>
No.657:s.13. 9.11. p.73	<日本映画批評:路傍の石>
No.659:s.13.10. 1. p.187	<映画館景況調査:京都:路傍の石;水戸黄門漫遊記後篇>
No.660:s.13.10.11. p.6	<面紗の彼方:舞踏會の手帖>

ハット』が昭和11年の外国映画部門で第3位、『蒼氓』が昭和12年の日本映画部門で第2位、『淑女は何を忘れたか』が第8位³⁾、『大阪夏の陣』が第9位、『路傍の石』が昭和13年の日本映画部門で第2位、『舞踏会の手帳』が同年外国映画部門第1位、『オーケストラの少女』が第2位、『子供の四季』が昭和14年の日本映画部門第6位（ただし、中野さんはこの映画は見ていない）、『望郷』が同年の外国映画部門第1位という具合で（谷川 [1993: p.79, pp.88-95]）、中野さんが『中学生』で言及している22本の映画のうち10本がベストテンに食い込んでいることになる。

第2の観点は、中野さんの見ていた映画が『キネマ旬報』の中でどういった取り上げられ方をされていたかというものである。第14表を見ていただきたい。これは、第13表に出てきた映画の表題や映画館名を手がかりにして『キネマ旬報』の中から関連情報を探り出してきたものである。この表から言えることは、中野さんが『中学生』の中で言及している映画は、レポタージュドラマ『北支・蒙古』、『水戸黄門（続編）』といった少数の例外を除いてほとんど全部『キネマ旬報』の中に見いだすことができるということである。これは、すでに先で触れておいた封切り映画の圧倒的な多さを考慮に入れるなら、実に驚異的な事実と言っていい。中野さんが見た映画はそのほとんどが封切り館で見たものらしいから、「映画館景況調査」のセクションに関連記事がのっているのは当然なので、第14表の検討からはこの項目を外すことにするが、それでも、普通で言えば、毎号ある程度の本数の映画の紹介のある「日本映画紹介」や「外国映画紹介」のセクションはともかくとして、ある特定の封切り映画が「主要日本映画批評」、「主要外国映画批評」、「各社試写室より」といったセクションに出てくる確率は相当低いと考えていいはずである。それなのに、第14表に見られるように、ほとんどどの映画もそれらのセクションに顔を出しているのだ。さらに言えば、『舞踏会の手帳』、『路傍の石』、『シピオネ』、『望郷』の4つになると合評

昭和13年になると3円25銭である。この両者を比べると、昭和13年が若干多い気がするが、正月興行の「オーケストラの少女」の1円については菅平のスキー場からの帰りにはるばる東京の親戚の家に立ち寄った折りに評判の映画に連れていってもらった可能性も高いので（後述の「オーケストラの少女」の個所を参照のこと）、これを差し引くと2円25銭となり、金額的には中学校男生徒の平均額の使い方よりやや少なくなる。ただし、『『中学生のみた昭和十年代』拾遺』の(1)、(2)、(3)（中野 [1990; 1991a; 1991b]）にのっている昭和10年11月27日から1年間の映画関係情報（この間に中野さんは『中学生』にのっている場合以外にもさらに17回映画館に行っており、鑑賞本数も「ドンキホーテ」、「野生の呼び声」、「白き処女地」、「幽霊西へ行く」などタイトルのはっきりしているものだけで26本にもなる）を考慮に入れるなら、実際の映画鑑賞本数は『中学生』での数字より相当多くなる可能性が高いこと、また「映画は親か同様な年輩の同伴でないと中学が禁止している」（中野 [1990: p.47]）といった中野さん自身による注記からすると、誰か大人についていって自分で払わなくてもよかった場合も考えられるし事実そういった場合も日記の中によく見受けられるので、中野さんの映画観賞本数は当時の中学生の平均鑑賞本数よりはるかに多いということになるはずである。

今度は、中野さんはこういった話題性をもった映画を見ていたのかという点の検討に移ろう。中野さんの見ていた映画の本数は圧倒的に少なかったわけだが、非常に面白いのは、こういった話題性をもった映画を見ていたのかということになると、これが驚くほどの話題性と人気度を誇る映画ばかりに集中しているのである。その点をここでは次の3つの観点から確認していくことにする。

まず第1は、中野さんの見ていた映画が『キネマ旬報』の年間ベストテンにどれくらい取り上げられているかという観点である。この基準で見ると、『モロッコ』が昭和6年の外国映画部門で第1位、『オペラ・

☆1 (13)などの数字は、第10表の小見出し番号を、また〈s.11. 5.18〉などは年月日（この場合は〈昭和11年5月18日〉）を示す。

☆2 入場料についての情報は『キネマ旬報』の「映画館景況調査」のセクションからのものである。

☆3 「映画館景況調査：京都：舞踏会の手帳」(No.651:p.98)によれば『舞踏会の手帳』が上演されたのは6月25日から27日にかけての3日間。他方、『中学生』では『舞踏会の手帳』を見に行ったのは、6月26日の「兄と孝吉っとな」のエピソード(p.208)より前のこととされている。したがって、『中学生』での並べ方が正しいとすれば、見に行ったのは6月25日ということになるはずである。

☆4 中野さんが「映画館景況調査：京都」(No.661:pp.88-89)にのっている映画館で見たものと仮定すれば、10月3日の前後でニュースをやっている封切り館は松竹劇場しかないことになる。ちなみに、この週(9月29日から10月3日まで)この劇場でやっていた映画は「オペラ・ハット」と短篇とニュースの3本である。

☆5 『中学生』(p.247)によれば、中野さんは『望郷』上映の第1週目、つまり『子供の四季』の併立されていない週に見に行っている。「映画館景況調査：京都：望郷」(No.674:p.107)によれば『望郷』上映第2週は2月16日から始まっているので、中野さんが『望郷』を見たのは15日以前の1週間ということになる。ところが、2月11日には兄が『望郷』を見に行っており、『中学生』での並べ方からすると中野さんはその日より後に『望郷』を見に行っていることになっているのだから、結局〈2月12日から15日のいつか〉ということになるわけだ。

ことは、絶対量で言えば中野さんが見た映画の本数は圧倒的に少ないということである。

次に、この当時の中学生の映画を見る頻度と比べた場合中野さんの見ていた本数が多いのか少ないのかという点になると、残念ながら直接比較する材料がない。ただし、『物価の世相100年』(岩崎[1982: pp.94-95])には昭和10年時点における愛知県下の中学生の小づかい銭調査(愛知県校外教護連盟が県下公私立中学校生約5千人についておこなったもの)の結果がのっているのでこれを手がかりにして考えてみる。ここでは中学校男生徒の1カ月の小づかいは平均2円11銭で、用途別では娯楽場入場費が月22.6銭²⁾。これを12カ月分掛け合わせると1年間で2円65銭ということになる。他方、第13表の入場料を足し合わせると、中野さんが(自分で払ったとして)映画入場料として支払った額は、昭和11年が1円80銭、昭和12年は1円40銭、

第13表 《『中学生』に出てくる映画情報一覧(本文登場順)》

-
- ☆1(13) s.11. 5.18(月) [京宝でPCLの『我輩は猫』(p.54); ☆2 入場料:30 銭, 50 銭, 1 圓]
- (20) s.11. 6. 1(月) [夜, 松竹座で『オペラ・ハット』(p.60); 50 銭, 1 圓]
- (26) s.11. 9.20(日) [《棚ぼたで, 京宝へ連れて行ってもらう》(p.88)『丘の一本松』; 50 銭均一]
- (35) s.11.12. 6(日) [松竹座で『ゴルゴダの丘』(p.113); 50 銭, 1 圓]
- (39) s.12. 2.25(木) [(帝國館で)映画『蒼氓』。上の中野の伯母と(p.119); 50 銭, 1 圓]
- (42) s.12. 4.10(土) [鈴木の叔母と京都座で『大阪夏の陣』(p.129); 50 銭, 1 圓]
- (48) s.12. 7.23(金) [《レコードにて二, 三年前の J.O. 映画の主題歌》(p.145)]
- (50) s.12. 9. 5(日) [(京極映画劇場で)『モロッコ』(p.155); 20 銭均一]
- (51) s.12. 9.26(日) [《南座は日活映画で『淑女は何を忘れたか』》(p.156); 20 銭均一]
- (52) s.13. 1. 7(金) [《東京(日比谷映画劇場)で, スキー靴のまま皆で『オーケストラの少女』》(p.171); 1 圓均一]
- (58) s.13. 3.29(火) [《京宝で『オーケストラの少女』…五回目だ》(p.190); 50 銭均一]
- (64) s.13. 6. x(?) [ノボチャン・進ちゃん・浩と松竹座で『舞踏会の手帳』(pp.207-208); 特別料金 B 席 1 圓, A 席 1 圓 50 銭(税共); ☆3 6 月 25 日のはず]
- (70) s.13. 8.28(日) [浩と兄と松竹座, 『シピオネ』(p.221); ?]
- (72) s.13. 9.13(火) [火曜日に(帝國館で)『路傍の石』(p.224); 50 銭, 1 圓(税別)]
- (73) s.13. 9.18(日) [夕方, 京宝へ。レポタージュドラマ『北支・蒙古』, 『水戸黄門(続篇)』(p.225); 55 銭均一]
- (74) s.13.10. 3(月) [《ニュース映画の感激》(p.226); (☆4 松竹劇場か?); 20 銭均一]
- (76) s.13.11. 1(火) [エノケンの映画(p.229)(=「エノケンの大陸突進後篇」), 『冬の宿』(p.230); 55 銭均一]
- (83) s.14. 2.11(土) [兄, 母と京宝で『海賊』を, 松竹座で『ペペルモコ』を見る(p.245)]
- (86) s.14. 2. y(?) [『望郷(ペペルモコ)』は見たが, 『子供の四季』は見ず(p.247); 60 銭, 1 圓 20 銭; ☆5 2 月 12 日から 15 日までのいつか]
- (89) s.14. 4. 2(日) [兄姉弟と郁生ちゃんと京宝で『マルコ・ポーロ』(p.252); 60 銭, 1 圓]
- (89) s.14. 4. 2(日) [弟と郁生ちゃんと朝日会館で『ステージ・ドア』(p.252); ?]
-

被ったのは、「[それまで] 数多く見せて得心させる観客を多く持つ地方」(No.667: p.111) だったようだ。また日本政府の対中国政策が当時の国民一般に広範に支持されていたことを暗示しているという意味で興味深いのは、入場税に対する観客たちの肯定的・好意的反応である。どうやら「支那事變特別税として入場税一割徴収が[昭和13年]4月1日から課せられて居るが、[興行成績には]たいした影響はない。…聖戦一年有半になると凡ゆる人がさういふことを呑み込みますね。仕方ないぢやなく、當然のこととして三十三錢拂って居る」(No.667: p.113) という具合だったらしい。

いずれにせよ、これまた「昭和十三年度映畫界總決算」でなされた「現在戦争といふ背景のない現代劇を見ると何かおかしいやうに思ふ時がある」(No.667: p.92) という一映画評論家の発言の中に、当時の人々の日常的意識の中に浸透していたらしいこの事變の影響の深さを読み取ることができるように思う。

映画の作られ方に見られる傾向ということ言えば、文芸物もしくは純文学の映画化傾向や現代映画の流行／時代映画の衰退が見て取れるようだ。

(B2) 中野さんが見た映画の本数と話題性

第13表は、『中学生』に出てくる映画関係の情報を、映画のタイトル・映画館名・映画会社・いつ誰と行ったか等に絞って年代順に並べ、これに『キネマ旬報』の「映画館景況調査」のセクションに見られる入場料についての情報を書き込んだものである。これで見ると、中野さんは昭和11年には4本、昭和12年に4本、昭和13年に9本、昭和14年4月までに3本の映画を見ていることになる。これを、当時封切られていた映画の本数と比べてみると、昭和11年で日本映画446本、外国映画343本、昭和12年で日本映画393本、外国映画285本といった具合なので (No.597: p.80; No.632: p.85; No.702: p.52), まず言える

昭和12年7月大蔵当局が輸入映画本数を減らすように業者に通告したことに端を発した洋画輸入禁止令は、同年8月の洋画業者の大蔵省への嘆願も空しく同年9月には「外国映畫の輸入は今年中許さず」という「大蔵省の達示」によって結局現実化してしまうことになる（No.632: p.88）。その結果、外国映画封切総数は昭和10年の311本、昭和11年の343本が、洋画輸入禁止令の出された昭和12年には285本、そして昭和13年と14年には各々140本と激減している（No.562: p.323; No.702: p.52）。

ニュース映画の流行やニュース映画館の興隆について資料的に確認しておくとおのようになる。まず『キネマ旬報』の「三七年度總決算」には、昭和11年12月30日東京有楽町の日劇地下にオープンしたニュース・短編映画専門館の「第一地下劇場」（講談社 [1989 a: p.120]）に言及しながら、「日本劇場地下第一劇場がニュース劇場として誕生して一年、…各地に『ニュース映畫館』興隆の機運…[昭和12年]7月日支事變が勃発するや、各新聞社、或は従来の短篇映畫製作業者が競って、戦地ニュース映畫を提供…ニュース専門劇場が新設され…[昭和12年]七月中のニュース映畫檢閲数が二千本を超過…」(No.632: p.84)と述べられている。また翌年の座談会形式での「昭和十三年度映畫界總決算」でも、「ニュース映畫が映畫の威力を一般民衆に傳へ得たといふこと、[これが]今年 [=昭和13年]の最大の收穫 [の一つだ]」とか「映畫の報道力を遺憾なく發揮した東寶文化映畫の仕事と、大毎東日、朝日、同盟、讀賣のニュース映畫——この二つが[今年度の]大きな功績だな。」といった発言が見られる（No.667: p.93）。

最後に三時間制や入場税について。「昭和十三年度映畫界總決算」には、「事變と映畫事業…それは三時間制とか、入場税とか、外[国映]畫の禁止とか、生フィルム of 制限とか、いろいろあります」（No.667: p.111）と概括的に触れられているが、三時間制は昭和13年2月から、入場税の方は同年4月から始まっている。三時間制の影響をもろに

ために映画会社側が具体的に打ち出し始めた新たな動きを念頭においている。この動きは、昭和10年頃に顕著になりはじめたもので、『キネマ旬報』では「新映畫劇場の大量觀客收容主義」や「既成〔映画〕會社の大劇場主義」という表現で言い表されている傾向を指す（No.562: p.321; p.322）。そしてこの傾向は、一方では、「丸の内を中心とする東寶系五十錢興行の大衆主義」という形で、他方では、大劇場における日本映画と外国映画との並立や「特殊なるアトラクション」とのセットという形で映画興行を大衆化していく仕組みによって支えられていたようだ（No.562: p.323）。例えば、「我輩は猫である」の上映は「パラマウントの〔洋画〕普通作品と併立されて日本劇場を満員にし」（No.575: p.110）ているし、京都の京都寶塚劇場の場合は、「映畫と實演で三十錢の觀客吸収」（No.578: p.35）を狙ったり、50錢均一料金での客引きに加えて、「パ〔ラマウント〕社が誇る色彩映畫『丘の一本松』」を藤山一郎主演の「『太洋の寵兒』と云ふPCL作品」とセットにして上演を行っている（No.589: p.33）。

ここで若干思弁的にはなるが、第1点の、とりわけ「洋畫トーキーの魅力」と、第2点の複合的一掃結に触れておく。それは、それなりの鑑識眼を備えた觀客層の大量出現の可能性である。「一九三五年度總決算」には昭和10年度の特徴の一つとして「都下各新聞紙や映畫雜誌に所載さるるところの封切前の映畫批評が映畫館に封切された映畫の興行價值を或程度まで決定すると云ふ新しき傾向」（No.562: p.323）が指摘されているが、この傾向は、こうした脈絡で意味づけることができるように思う。

第3は、事變が映画事業に与えた甚大な影響である。事變の影響自体はすでに昭和6年の満州事變のあたりから見られたものであるが、昭和12年7月の日支事變以降、洋画輸入禁止令、ニュース映画の流行やニュース映画館の興隆、三時間制や入場税といった形でその影響はより深刻なものになっていったようだ。

第12表 戦前・戦中の映画館数・映画館入場者数

年	映画館数		映画館入場者数 人
	全国	東京	
1925 (大正14)	813		
1926 (" 15)	1,057		153,735,449
1927 (昭 2)	1,172		164,404,717
1928 (" 3)	1,269	199	181,279,288
1929 (" 4)	1,270	211	192,494,256
1930 (" 5)	1,392	223	198,175,447
1931 (" 6)	1,449	232	206,994,908
1932 (" 7)	1,460	238	220,714,861
1933 (" 8)	1,498	241	225,265,826
1934 (" 9)	1,538	240	244,389,636
1935 (" 10)	1,586	239	229,965,833
1936 (" 11)	1,627	245	251,652,380
1937 (" 12)	1,749	255	294,049,008
1938 (" 13)	1,875	291	344,411,060
1939 (" 14)	2,018	305	419,787,726
1940 (" 15)	2,363	320	440,274,671
1941 (" 16)	2,466	326	463,272,683
1942 (" 17)	2,157	320	
1943 (" 18)	1,986	316	
1944 (" 19)	1,759	369	
1945 (" 20)	1,237	102	

〔出所〕「映画館数」はNIRA編『生活水準の歴史的推移』
 (昭60.3)「戦前の映画館入場者数」は内務省警
 保局『映画検閲年報』。日本映画復興会議パンフ
 より。 山田(1997;p.39)から転載

画館入場者数が2億人を突破したのが1931(昭和6)年である。その後、1935(昭和10)年に若干の落ち込みがあるとはいえ、全体的趨勢としては、映画館数も映画館入場者数も1941(昭和16)年までは着実な伸びを見せている。その意味で、ここで問題にしている時期は映画興行の大衆化の進展局面にあると見ていいだろう。しかしここで映画興行の大衆化戦略の発現と言う場合には、そうした大衆化路線を推し進める

(B1) 当時の映画界の状況について

まず『中学生』で取り上げられている昭和10年頃から14年の春にかけての時期の映画界の状況を特徴づけるとすれば、次の3点をあげることができるように思う。

まず第1は、映画がこの時期無声映画から発声（トーキー）映画の局面へと急速に移行しつつあったということである。日本で本格的なトーキーが製作されたのは、1931（昭和6）年、松竹蒲田の五所平之助監督作品「マダムと女房」だったというのが定説らしいが（佐藤 [1995: p.330]; 山田 [1997: p.58]）、佐藤忠男（1995）によれば、「日本映画全体がほぼトーキー化するまでには五年ほどかかっている」（p.332）そうだ。事実、昭和10年度の製作本数で見ると、この年の封切邦画総数440本（前年度は399本）のうちトーキー作品は133本をかぞえ、トーキー製作率は約3割で、前年のトーキー作品数61本の2倍以上の増加を示している（『キネマ旬報』[No.562: p.322; なお以下、『キネマ旬報』への言及・引用などにあたっては、雑誌番号と頁数のみを記すことにする]）。ちなみに中野さんの見ていた「我輩は猫である」も、「山本嘉次郎が監営するトーキー」（No.573: p.112）作品の一つであった。そしてそれまで特に阪東妻三郎や市川右太衛門といった時代劇映画のスーパースターたちによって設立されていた「独立プロはトーキーの設備をととのえるだけの資力がないために、つぎつぎに大手の松竹や日活に吸収されていった」（佐藤 [1995: p.332]）。このようにトーキー化は「[映画]製作の企業化」（No.632: p.84）を生み出していったわけである。この邦画トーキー化に大きな刺激を与えていたのが「洋畫トーキーの魅力」であって、「外[国映]畫トーキーならではの味はへぬ畫の面白さ、スケールの大きさ、技術的な諸方面の優秀さ」が一般観客層を魅了していたらしい（No.562: p.323）。

第2は、映画興行の大衆化戦略の発現である。第12表に見られるように、映画館数が1000館の大台を超えたのが1926（大正15）年、映

くために何ができるかという観点から、自分の現在を一つの「見もの」として突き放して眺めるというスタンスを取ること——これに成功すればその人には心理的余裕が生み出されてくるという効果があるはずだ——によってこの危機を切り抜けようとしていることが見て取れる。そして3日後の友人への葉書には、

…言い遅れたが僕は予想通り投げ出された。勿論、入試の話だ。しかし僕は暗闇ではない。ゲーテは、あらゆる彼の周囲の状況を利用して彼の内容を整える材料とした。彼はいかなる体験をも必要とし、かつ、それを求めてあらゆる経験に身を進めた。これを思えば、僕はこの機会を感謝しないわけにはいかない（59「増田へ」, p. 190）

と、高校不合格によって追い込まれた苦しいはずの状況に、ゲーテの思想を反芻する中から、「暗闇」という受けとめではなく、自分を鍛えてくれるはずの「あらゆる経験」の提供という「感謝」すべき「機会」の到来という積極的な意味づけを与えようとしているのである。

こうして見てくると、本とのつきあい全般にわたって見られる中野さんのクセである《自分に引きつけた本の読み方》や《思考表現の‘駒’的活用》傾向、それに時折動員されてくる標語の活用、これらのいわば頂点に《ゲーテへの思い入れ》というクセは位置していると言えるかもしれない。

（B） 映画の場合

中野さん自身の映画とのつきあい方の特徴の検討に入る前に、同時代の『キネマ旬報』やいくつかの映画史文献の助けを借りて、当時の映画界の状況についてある程度の見取り図を描き出しておくことにしよう。

僕は『ファウスト』を読み終わる。ゲーテの偉大さを、つくづく知る。各人物によってあらわされた彼の思想が、躍動している。ファウストは彼の自叙伝ともいえるものだそうだ。メフィストは、神からつかわされ、人間に不断の努力をさせる刺激剤である。…高遠、偉大なる思想、とうていはかりしれない。(6「ファウスト」, pp. 31-32)

ゲーテの世界を前提にして物事を考えている例としては、次の2つをあげておこう。一つは、期末試験に望む自分自身を励ます言葉として「困難がメフィストなら僕はファウストでなければならない」(21「席次」, p. 63)というキャッチフレーズを思いついていること。もう一つは、自分が感動した夕映えの素晴らしさを友人に伝える際に、「…夕映については思い出だけで胸が躍ります。世界中の人に見せたい。まったく、僕らだけがあの夕映を見るのは罪ではないでしょうか。ゲーテの言った『永遠の夕映』とは正にこれでしょう。…」(67「高原の日々」, p. 215)という形で、ゲーテの言葉を動員してきていることだ(ちなみに、これら2つの場合とも、すぐ上で上げた第1のクセの現れのゲーテ版と見なすことができる)。

そして、《ゲーテへの思い入れ》の顕著な現れとしては、ゲーテの思想による危機ののりこえのエピソードをあげることができる。これは、この時期の中野さんにとっての一大危機と言っていい高校不合格という事態に直面した時にゲーテの思想が動員されてくることを指す。まず合格通知が届かなかった3月29日の日記には、「『ゲーテ研究』を読む。投げ出された僕が、どんなにして更に輝かしい光を新たに仰ぐことができるかということ、こいつは確かに見ものだ」(58「谷井伯父死去と高校不合格」, p. 190)と書き記されており、苦境に立たされた自分の現在にとどまって内向する(=どつぼに嵌まる)のではなく、ゲーテのアイデアを媒介にしながら、「投げ出された」自分のありうる未来を切り開

イルを取ることもある。本の世界への中野さんの没入の深さは、例えば「…その明るさのなかを僕は静かに歩いて行く。その明るさの彼方にジュリエットがほほえんでいるのだった」（44「美しい夢」, pp. 131-132）といった具合に本の中の登場人物が夢の中にまで出てきていることから推し量ることができるはずである。要するに、中野さんの本とのつきあいには本の中の出来事や登場人物の言動・発想が彼の思考世界の構成要素として重要な位置を占めるほどまでの深さを持っている場合があるということである。

二つ目は気に入った標語の抜き書きである。『中学生』の中には、『愛の光がなかったなら生きていくことに何の値打ちがあろう』（シルレル [9「プチ・ショウズ」, p. 40]), 『投げ出されて自分で立ち上がるとたんに、人は幸福の糸口を掴む』（フランクリン [9「プチ・ショウズ」, p.41; 21「席次」, p. 63]), 『偉い大人になろうと思うよりも偉い子供になれ』（ベーデン・パウエル卿 [14「英雄観と弘法さん」, p. 56]), 『困難は人の真価を証明する』（エピクテートス [21「席次」, p. 63]), 「すべての原因は『意志に欠けているのだ』」（ヴィクトル・ユゴー [21「席次」, p. 63]) といった標語が書きつけられている。中野さんがどういう具合にしてこれらの標語と出会ったのかは定かではない。が、おそらく例の自分に引きつけた形での読書経験を積む中から、生きていく上での教訓や示唆を感じとった時、あるいは自分自身を励ます必要が出てきた時、気に入ったフレーズを書き抜いてきたのではなかろうか。いずれにせよ、これらの標語は、第1のクセとしてあげた思考表現の‘駒’的活用傾向のいわば延長線上に位置づけることができるように思う。

三つ目は、相当激しい《ゲーテへの思い入れ》の傾向である。ぼくがこうした判断をしているのは、『中学生』のいくつかの重要な個所でゲーテが顔を出してくるからである。まず中野さんに大変強烈な印象を与えた『ファウスト』との出会いは次のように書きとめられている。

ポール・ゴオガンの『ノア・ノア』を読んでいる。彼は『野蛮人』になった文明人だ。…彼はマオリ人になってしまってマオリ人を語っているのだ。文明社会における女性への偏見に対する警告は、僕が野麦村で感じたところのものだ。古事記と多くの類似点を持つマオリ神話をもっているマオリ人に、我々の祖先の神々の姿を見る。ノア・ノア、おお、いいかおりだ。(63「ノア・ノア」, pp. 205-206)

しかし中野さんの場合の本とのつきあいには、そうした思考スタイルと響き合いながらも、本の世界への没入度という点ではより深いものを感じさせられる場合がある。ここでは次のような、相互に関連しあった3つのクセに注目しておきたい。

一つ目は、《思考表現の‘駒’としての本の中の出来事などの活用》傾向とでも呼べるものである。これは本好きの中野さんにとっては‘自然な’ことだったらしく、本の世界の出来事や登場人物たちの言動・発想などを思考を推し進めていく際のいわば‘駒’として使って自分が直面している問題を読み解いていくやり方のことを指す。すぐ前で〈モグリ〉に憤激する中野さんの姿を紹介したが、「…こんなものが五十銭、馬鹿げた話だ。しかし、時間が許さぬ。」(p.64)という先に引用したくぐりに続けて書かれている「メーテルリンクも『青い鳥』で、時間を意地わるの怖い小父さんにした」(22「六月の日々」, p.64)という文などはその典型例である。この傾向はまた、例えば「めっきり朝の空気が冷たくなり、身がひきしめるような大気のなかをカバンを肩から下げ、ゲートを堅く巻いて五条坂を登っていく。／なんという愉快さ。エウフォリオンが天へ昇る気持ちだ。生きている鳥は飛ぶ鳥なのだ。町筋は出たばかりの朝日に輝いている」(29「秋の日々」, pp.97-98)といった具合に、本の中の登場人物を出してきて自分の気持ちを表現するというスタ

しかも受験用の読書を忌み嫌っていたことである。〈モグリ〉への憤慨を書きとめている「ああ、僕は遂に今日モグリ——漢文の参考書——を買ってきた。なんという貧弱な内容よ。方便という言い逃れで、これからこれを使うと思うと、涙がおしだして来やがった。こんなものが五十銭、馬鹿げた話だ。しかし、時間が許さぬ。…」(22「六月の日々」, p. 64) というくだりからは、受験用の読書に対する強烈な怒りと苛立ちがヒシヒシと伝わってくる。

ここでとりわけ第1や第2の発想という形で析出してきた傾向は、さしあたりは読書についての考え方についての中野さん個人の特徴と言えるものだが、こうした傾向は、二重の意味での《当たり前》の発想の場合に顕著に見られるように、共同主観的性格を強く持っているように思う。そこで(論証するとなると相当難しいけれども)若干想像力をたくましくすれば、次のように言うことができるかもしれない。つまり、これらの傾向は、おそらく岩波教養主義の影響の下に、当時の旧制中学生層を含めたエリート学生層の間に相当な拡がりをもって共有されていた可能性の高い読書観の一種の反映として——つまり、そうした読書観が中野さんにおいて個性的な現れ方をしたものとして——読み込むことができるかもしれない、ということである。

(A4) 中野さんの本とのつきあい方のクセ

中野さんの一つの思考のスタイルとして《刺激を受けた個所の引用→思索の展開》というパターンがあることについては、すでに〈(8) 哲学的思索と内省〉の個所で「真人と名利」や「深い心」を例に挙げながら触れておいた(水野 [1994: p. 379])。このようにあくまで自分に引きつけた形で本を読み進めていくというやり方は中野さんの本とのつきあい方の1つのクセとすることができる。類似の思考様式は、例えばポール・ゴオガンの『ノア・ノア』についての次のような感想の場合にも見て取ることができるものだ。

葉集，上巻』を買って来てもらおう。」(17「万葉集」，p.58) といった日記の文章は，単に岩波文庫を買ったという事実を書きとめているにすぎないが，「夜，鈴木のお母さんが五円くださった。岩波文庫がだいぶん買える。」(42「新四年生の四月」，p.130) といったくだりからすると，本を買う際の判断基準として岩波文庫が一つの目安になっていた可能性が大きいと言えそうである。

第2は，中野さんには二重の意味での《当たり前》の発想が見てとれるということである。一つは，日本の古典を読むのは《当たり前》と見なされていること。読書リストに日本の古典ものが相当数上げられていたことはすでに見たが，読み方についての覚え書きを記した次のようなくだりの中には，はっきりとした日本の古典重視の基本姿勢を読みとることができるだろう。

書物を買すぎて読む時間に困るから，だいたい次の方法で読むことにする。古事記は解釈の本を買って家で毎日三十分ずつ読む。万葉集，北越雪譜，古今集，十六夜日記を古事記と平行して読んでしまう。クオレ，スケッチ・ブックは，ひまひまに読む。次に購入すべきは，玉勝間，胡麻と百合。(29「秋の日々」，pp.96-97)

もう一つは，漱石・鴎外・露伴・谷崎といった文学者たちの名前はいちいち断らなくても口をついて出てくるのが《当たり前》という前提の下に日記が書き進められていることだ。例えば，「夜，向いへ行き，十二時まで谷崎潤一郎や石川啄木やらを読む。」(7「弟も二中へ」，p.36) とか，「『お湯の中でも，こーりゃ，花が咲くよ…』，心から楽しそうに歌っている。夏目漱石をかりれば，『方幾里の空気が蚤に刺されていたたまれないような』感じである。…」(19「人夫歌う」，p.60) といった具合に，である。

そして第3は，自分用の読書と受験用の読書とをはっきりと区別し，

『谷崎源氏』は出版にこぎつけ、「発売後すぐ五万部の追加注文を受けるなど好評」を博した（塩澤 [1995: pp.72-73]; 講談社 [1989 b: p.139]）。ちなみに中野さんが『谷崎源氏』を手にしたのは同年2月12日で「源氏（谷崎訳）を遂に注文してきた。最初の二冊をもちかえる。嬉し」（84「谷崎源氏」, p.245）とその喜びを書きとめている。

「昭和十二年前後つまり二・二六事件から日中戦争にかけての昭和史の山場ともいうべき時代、庶民は日常どんな生を営んでいたのか。それをできるだけ細部の事物にこだわって、同時代の文学から照らし出してみる」（立川 [1992: p.264]）という観点から、例えば『暗夜行路』や『雪国』、『風立ちぬ』、『墨東綺譚』（これらはすべて昭和12年に発表されている）等のていねいな読み直しを通して、この当時の時代の雰囲気をあぶり出すことに成功している著作に、立川昭二氏の『昭和の蹺音』がある。その立川氏に言わせると、「じつは、昭和十二年を頂点とした二、三年は、文学はかつてない豊饒な時期だった」（立川 [1992: p.9]）のだが、すぐ前の段落の検討を踏まえるなら、少なくとも『中学生』で見ると、中野さんの場合、そうした当時の話題作との関わりは非常に限定されたものであったと見てよいだろう。

（A3） 中野さんの読書についての考え方

それはともかく中野さんは、そもそもどういった基準で何を手がかりにして第11表に上げたような本を選び出してきたのだろうか。『中学生』の中には、残念ながら、この疑問点に直接触れたものは見あたらない。しかし、中野さんには読書の仕方についていくつかの前提的発想があったことは確実のように思われる。

その第1は、本を選び出してくる場合《目安としての岩波文庫》という発想を持っていたらしいということである。「午後、大丸で岩波文庫の『プチ・ショウズ』、『竹取物語』、『日本外史（下）』を買う。」（8「誠一叔父の渡満」, p.38）とか「八十銭をことづけて、岩波文庫の『万

れ、翌9月19日に四六判236頁の単行本として出版された（塩澤 [1995: p.67]）。そして実はこの出版に先立って9月7日と8日にはNHKで「連続ラジオ小説」という形で放送されている（日本放送協会編 [1977 b: p.681]）。こうしたメディア・ミックスの効果もあってか、出版後20日もたたない10月7日付『東京朝日新聞』の広告には、「450版突破」という文字と「出版界に起った物凄い一大颶風!! どこでも奪ひ合ひ引張り合ひだ!!」という広告文が踊っており、さらに、農林大臣有馬頼寧の名で「日本民族の生命力」というタイトルの推薦文が寄せられている（講談社 [1989 b: p.105]）。このように『麦と兵隊』は「大陸の野で父が、夫が、息子が、どう戦っているかを知りたがっている銃後の国民に圧倒的な勢いで読まれ、百万部以上の大ベストセラーとな」（塩澤 [1995: p.67]）るほどの反響があったのである。中野さんがこの本を読んだのは10月3日とあるから、まさに「一大颶風」の渦中での読書ということになる。他方、昭和13年、総合雑誌『中央公論』の3月号に載せられていた『生きている兵隊』の方は、「虚構の事実を恰も事実の如くに空想したのは安寧秩序を紊す」という理由で2月18日発禁になっていたものだが（正木 [1991: p.441]; 塩澤 [1995: p.66]）、中野さんはこれを『麦と兵隊』読了1週間後の10月11日に友人から借り受けてきて目を通して読んでいる。その感想は、「同じように深く立入って書いているのに、『麦と兵隊』より印象が散漫といえる」（74「十月の日々」, p.227）となかなか手厳しい。そして最後は、昭和14、5年にベストセラーになった谷崎潤一郎訳の『源氏物語』全26巻である。中央公論社が源氏物語の現代語訳の企画をスタートさせたのは昭和8年頃で、「『源氏』はやはり谷崎氏にもっていきよりほかにない」という中央公論社側の判断から俗に言う『谷崎源氏』は生まれることになる。谷崎が源氏物語の口語訳にとりかかったのが昭和10年だが、この時、「中央公論社では印税とは別に、月々五百円の原稿料を谷崎に支払う」という破格の約束を交わしている。こうして昭和14年1月23日『谷

最後に、以上の系列とは異質なものとしては、石野勝五郎『幾何のあたま』、山崎貞『英文解釈法』、小野圭二郎の単語集など少数の受験関係の本がある。

(A2) 同時代の話題出版物との関わり

同時代のベストセラーや話題本のうち第11表に顔を出してくるのは、次の4つ（もしくは5つ）である。まず第1は、昭和10年8月22日から『東京朝日新聞』、『大阪朝日新聞』夕刊に連載され始めた吉川英治著『宮本武蔵』である。これは「回を追うごとに読者を獲得していき、「二〇〇回連載の予定が一〇—三回までのび、新聞小説史上空前の人気作品となった」（講談社[1989 a: p.92]）ものだそうだが、『宮本武蔵』が大変な人気を博していたらしいことは、『中学生』の中のいくつかの記述からもうかがえる。例えば、「『宮本武蔵は、近頃はない、誰にでも読まれている小説…や』と、父が褒めると、皆、同感」（32「宮本武蔵」, p.108）しているし、高校受験のために宿泊していた先での老夫婦の会話の中にも、「『あの浪人はなにものやろなあ。額に傷があるが』。…『城太郎も気絶してでっしゃろ。朱実も気絶してでっしゃろ』。…」（56「姫路高校受験」, p.181）といった具合に登場してくる。また中野さん自身も、「宮本武蔵、快、亦快。佐々木小次郎も亦、味な剣を使う。…」（67「高原の日々」, p.216）と大変気に入っている。第2は、昭和10年11月5日発売の山本有三著『心に太陽を持つて』。これは少年少女向けに『日本小国民文庫』全16巻の第1回配本として新潮社から刊行されたもの（講談社 [1989 a: p.107]）で、この〈少年少女向け〉という出版社側の狙いが功を奏したというわけでもないのだろうが、『中学生』では弟の浩が買ってもらった本として顔を出している（8「誠一叔父の渡満」, pp.38-39）。第3は、火野葦平著『麦と兵隊』と石川達三著『生きている兵隊』で、昭和13年に非常な注目を集めた戦争文学である。『麦と兵隊』は総合雑誌『改造』の8月号に発表さ

第11表 『中学生』に顔を出す本などの表題一覧（本文登場順）

ゲーテ『ファウスト(上・下)』, アンデルセン『絵なき絵本』;トルストイ『人間はなぜ生きるか』, 中勘助『銀の匙』, トオマスマン『悪童物語』;大谷光瑞『仏教の要諦』, トルストイ『人間はなぜ生きるか』;トルストイ『幼年時代・少年時代』, 『人間はいかにして生きるか』, 『古事記』;メリメ『カルメン』, 紀貫之『土佐日記』, 高木敏雄『比較神話学』;谷崎潤一郎, 石川啄木;ドォデュ『プチ・ショウズ』, 『竹取物語』, 『日本外史(下)』, 『心に太陽を持って(唇に歌を持って)』[弟];『フィリップ短編集, 小さき町にて』, 『全訳グリム [童話集第1巻]』, ベルンハイム『歴史とは何ぞや』, 石野勝五郎『幾何のあたま』[受験準備], 山崎貞『英文解釈法』[受験準備];研究社の英文イソップ[安立], エドガー・ア・ランポーの探偵小説[神谷];ハウプトマン『希臘の春』;『万葉集, 上巻』;田口卯吉『日本開化小史』, 塚本『国文解釈法』;『徒然草』(《真人と名利》論);井上頼寿『京都民俗誌』, マルコ・ポーロ紀行の訳文(ジパングのところ);宣長の『うひやまふみ』, 『鈴屋問答録』;『千曲川のスケッチ』[島崎藤村];室鳩巢『駿台雑記』[浩の国語の教科書], 北越雪譜, 古今集, 十六夜日記, クオレ, スケッチ・ブック, 玉勝間, 胡麻と百合;『古事記全釈』, 『松浦宮物語』;露伴『五重ノ塔』;得能文氏『深い心』[国語正読本];紫式部日記, ユーカラ, ラフカディオ・ハーン『怪談』(英和対訳);アンデルセン自伝;『神変大菩薩』;『若きウェルテルの悩み』;「宮本武蔵」[新聞の連載小説];『ゲーテ研究』;世阿弥『能作書・覚習条書・至花伝書』, キュールンゲン『一老人の幼児の追憶』;鷗外『阿部一族』;アイヒェンドルフ『愉しき放浪児』;岡倉覚三『茶の本』;ポール・ゴオガン『ノア・ノア』;漢和小辞典;朝日夕刊[増田];日本古代文化史, 小野圭次郎の単語集;火野葦平歩兵軍曹『麦と兵隊』;石川達三『生きている兵隊』(中央公論, 発禁);アレクサンドル・デューマ『モンテクリスト伯爵』;斎藤茂吉『万葉秀歌』上巻;源氏(谷崎訳);『クオバディウス』;ゲーテ『ウィルヘルム・マイスター』, ハイネ詩集[明ちゃん];

『麦と兵隊』や石川達三の『生きている兵隊』もこのグループに入ると見ていいだろう。

第3は伝記的もしくは自伝的色彩の濃い書物群で, トルストイ『人間はなぜ生きるか』, トオマスマン『悪童物語』, トルストイ『幼年時代・少年時代』, アンデルセン自伝, 『若きウェルテルの悩み』など, 表題からしても, 人生とは何かとか生きることの意味を直接・間接に考える際の刺激剤として作用していた可能性が高い読み物である。

さらには, 『日本外史』, 田口卯吉『日本開化小史』, 『日本古代文化史』といった具合に若干ながら歴史への関心も見られる。

データを同時代の情報源から探し出してきて、これを背景データとして組み込んでくることを指す。より具体的に言えば、このセクションでは、中野さんの日記が書かれていた同時代のメディア関連情報(例えば当時の音楽・映画状況などについての情報)の可能な限りの組み込みを試みるし、《時局》セクションでは同時代の時局関連情報の組み込みを目指すことになる。なぜこうした部分修正をするのか。それは、『中学生』に出てくる、このセクション(ならびに《時局》セクション)に関連した素材(=文章)の社会的・時代的意味を検討するに当たっては、こうした《関連素材有限化の原則》の一部解除がどうしても必要と思われるからであり、そのことを通じて、中野さんの個人生活史的側面の社会史的・文化史的背景を探ることが、中野さんにおけるメディアとのつきあい方(ならびに時代との向き合い方)の特徴を浮き彫りにするというこのセクション(ならびに《時局》セクション)のテーマに迫っていく上で、より適合的と思われるからである。

(A) 本の場合

(A1) 中野さんはどういった本を読んでいたのか?

第11表は中野さんが『中学生』の中で本のタイトルに言及している個所を本文登場順に一覧表にしてみたものである。この表を見ながら、中野さんはどんなタイプの本を読んでいたかという点についての確認をすることから始めよう。

まず第1に古典シリーズの読書があげられる。『古事記』、『土佐日記』、『竹取物語』、『万葉集』、『うひやまふみ』といった日本の古典ものが主なものだが、少数ながらゲーテの『ファウスト』といった西洋の古典も含まれる。

第2は近代・現代の文学もので、中勘助『銀の匙』、谷崎潤一郎や石川啄木のもの、『千曲川のスケッチ』、露伴の『五重の塔』、鷗外『阿部一族』などがこれにあたる。同時代の作品である火野葦平歩兵軍曹の

大衆化しつつあったラジオや否応無く耳に訴えてくる音楽は、この《入ってくるメディア》的性格を強くもっているということが出来るだろう。なお、このように《接近していくメディア》と《入ってくるメディア》とでは注目しようとするところが異なるので、両者がミックスされた場合を想定することができることは言うまでもない。

以下では、中野さんのメディアとのつきあい方の諸相を照らし出すために、まずはじめに《接近していくメディア》とのつきあいということで本と映画を、ついで《接近していくメディア》と《入ってくるメディア》とのミックスの例としてラジオならびに音楽とのつきあいを見ていくことにしよう。

なお、ここでこのセクション（ならびに《時局》セクション）における《関連素材有限化の原則》とでも呼べるものの一部解除について若干触れておきたい。これまでぼくは、あくまで『中学生』というテキストに分析対象を限定することを基本原則としてきた。そして、この限定素材を対象にした時そこに見いだされると判断される限りで——つまり『中学生』の文章に描き出される限りで——“中野さんらしさ”に関連すると思われる諸事象を浮き彫りにすることを分析の目標としてきたのである。つまり、『中学生』というテキストに関連素材を限定＝有限化することを通して、『中学生』という素材以外の関連素材に由来する‘新’情報出現の可能性をあらかじめ排除しておいた上で、一定の分析視点・分析枠組みとの関連で浮かび上がってくる、その限定素材のいくつかの意味を可能な限り特定化してくること、これこそがぼくの分析の仕方の主要な特徴とっていいものであった。これに対して、このセクション（と《時局》セクション）ではいくつかの個所で、『中学生』が扱うのと同時代の関連情報を導入するという形で《関連素材有限化の原則》の一部解除を行なうことにする。ここで同時代の関連情報の導入というのは、分析ターゲットとして設定している素材——つまり『中学生』というテキスト——のありうる意味を読み取っていくのに都合のよさそうな

- ◇63 「ノア・ノア」(17) pp.205-206
 ・65 「菅平行」(17) pp.210-212
 ・67 「高原の日々」(17) pp.213-218
- ◇64 「舞踏会の手帳」(17) pp.207-208
 ・66 「横笛」(17) p.212
 ・68 「東京の鈴木の家で」(18) pp.219-220
 ・70 「大丸の火事と大文字」(18) pp.221-222
 ・72 「路傍の石」(18) p.224
- ◇69 「再び菅平」(18) p.220-221
- ◇71 「足立見舞いと月夜」(18) pp.223-224
 ・73 「九月後半の日々」(18) pp.225-226
 ・75 「漢口陥落」(18) p.229
- ◎77 「歌舞伎初見」(19) pp.233-234
- ◇79 「鈴木郁生君へ葉書」(19) pp.236-237
 ・81 「愛称的敬語」(19) p.238
 ・83 「兄外泊」(20) p.245
 ・85 「風邪」(20) pp.245-246
- ◇87 「気晴らし散歩」(20) p.248
- ◇74 「十月の日々」(18) pp.226-228
 ◇76 「ジャズと絶叫」(18) pp.229-230
 ・78 「増田君との交信」(19) pp.234-235
- ◇80 「モンテクリスト伯」(19) p.237
 ・82 「受験直前」(19) pp.239-240
 ・84 「谷崎源氏」(20) p.245
- ◇86 「葉書交信」(20) pp.246-248
 ◇88 「クオバディウスと枚方火災」(20) pp.248-250
- ◇89 「姫高合格」(20) pp.251-254

ここで注意を促しておきたいのは、同じくメディアとのつきあいと言ってもその内実は、メディアそのものの特性ならびに個々人のメディアに関わる姿勢の違いによって大きく異なってくる可能性があるということである。ここでは、そうした点に留意しながら、中野さんのメディアとのつきあい方の特徴を考えていく際のとっかかりをつけるために、《接近していくメディア》と《入ってくるメディア》という2つの用語を導入してくることにしたい。《接近していくメディア》というのは、個々人に見られるメディアへの能動的関わりという側面をクローズアップするために作り出したもので、ある個人が自分から積極的に接近しようとしているメディアのことを指す。これに対して《入ってくるメディア》とは、メディアの特性上、個々人の能動的関わりの有無とは関わりなく、ある個人の日常生活の中にほとんど空気のように入り込んでいることが多く、まさにそれ故に目立たないけれども本人が気づかないうちに思わぬ影響を受けていることがあるメディアのことである。この当時

第10表 《読書・芸術鑑賞と標語》への言及のある小見出し一覧

- ◇ 1 「弟の誕生日と書籍購入」(2) pp.14-15
- 3 「同月同日」(3) p.28
 - 5 「春休み予定」(3) p.31
 - 7 「弟も二中へ」(4) pp.33-36
- ◎ 9 「プチ・ショウズ」(4) pp.40-41
- 11 「合同ハイク」(5) pp.51-52
- ◇ 13 「季節は初夏」(5) pp.54-55
- ◇ 15 「学期末試験前」(5) pp.56-57
- ◇ 17 「万葉集」(5) pp.58-59
- 19 「人夫歌う」(5) p.60
- ◇ 21 「席次」(6) p.63
- ◎ 23 「真人と名利」(6) pp.67-68
- 25 「知井坂越え小浜・海津の旅」(7) pp.76-83
 - 27 「母飛び帰るの報」(8) pp.92-93
- ◇ 29 「秋の日々」(8) pp.95-98
- ◇ 31 「エゴール・ブレイチョフ」(9) p.105
- ◎ 33 「深い心」(10) p.110
- 35 「冬休み近く」(10) p.113
 - 37 「正月十五日」(10) pp.115-116
- ◇ 39 「映画『蒼氓』」(10) p.119
- 41 「一子ちゃん新夫妻入洛」(10) p.128
 - 43 「井上先生と」(10) pp.130-131
- ◇ 45 「明ちゃんの結核」(10) pp.135-136
- 47 「木曾福島から白川郷への旅」(11) pp.141-143
 - 49 「旅のあと」(11) p.147
 - 51 「明君外出許可」(12) pp.155-156
 - 53 「中学最後の通知簿」(13) p.173
 - 55 「卒業翌々日の夢」(14) p.175
 - 57 「おたけどんへの手紙」(15) p.186
- ◎ 59 「増田へ」(15) p.190
- ◇ 61 「火の見から見る風景」(16) pp.197-198
- ◇ 2 「読書と冬の日」(2) pp.17-19
- 4 「三月十日」(3) pp.30-31
- ◇ 6 「ファウスト」(3) pp.31-32
- 8 「誠一叔父の渡満」(4) pp.37-40
 - 10 「音楽と散髪」(5) pp.46-47
 - 12 「ポート・レース」(5) pp.53-54
 - 14 「英雄観と弘法さん」(5) pp.55-56
 - 16 「中尾の叔父と富野の叔父」(5) p.58
 - 18 「試験の終り」(5) pp.59-60
 - 20 「オペラ・ハット」(5) p.60
- ◇ 22 「六月の日々」(6) pp.64-65
- 24 「短いメモ群」(6) pp.68-69
- ◇ 26 「最初の野外撮影の映画」(8) pp.88-89
- 28 「父母帰宅」(8) pp.93-94
 - 30 「名古屋の石黒夫妻」(9) pp.99-103
- ◇ 32 「宮本武蔵」(9) p.108
- 34 「巨椋池」(10) p.112
 - 36 「お火焚」(10) p.113
 - 38 「陸軍はファッション化」(10) p.118
 - 40 「春寒し」(10) p.121
- ◇ 42 「新四年生の四月」(10) p.128-130
- 44 「美しい夢」(10) pp.131-132
- ◇ 46 「風雲急とホット・ジャズ」(11) pp.138-140
- 48 「旅の野帳風メモ」(11) pp.143-146
- ◇ 50 「モロッコ」(12) p.155
- ◇ 52 「昭和十三年正月」(13) pp.170-172
- 54 「幼稚園の夢」(13) p.173
 - 56 「姫路高校受験」(14) p.181
- ◎ 58 「谷井伯父死去と高校不合格」(15) pp.189-190
- ◇ 60 「増田恵一君への葉書」(16) p.196
- ◇ 62 「想旅慕雲」(17) pp.203-204

『中学生のみた昭和十年代』と 個人生活史研究

——三段階の分析の試み——(下) - 3

水 野 節 夫

1. はじめに
2. 見出し分析 (以上第 38 巻第 3・4 号)
3. テクストのタイプの分析 (第 39 巻第 2・3 号と第 4 号)
4. インパクト分析
 - 4.1 自己もしくは自己形成へのインパクトと自己環境の構成要素 (以上第 40 巻第 1・2 号)
 - 4.2 中野さんの社会的自己形成へのインパクトの検討
 - 4.2.1 関連データの絞り込み方について
 - 4.2.2 中野さんの自己もしくは自己形成にインパクトを与えたと思われる諸事情 (以上第 40 巻第 3・4 号)
 - 4.2.3 小括
5. 終わりに (以上本号)

4.2.2 中野さんの自己もしくは自己形成にインパクトを 与えたと思われる諸事情 (承前)

(9) 読書・芸術鑑賞と標語 (第 10 表参照)

『中学生』からは、この当時中野さんが本、映画、音楽といったさまざまなメディアに身をさらしていたことがわかる。《読書・芸術鑑賞と標語》という括り方でここで浮き彫りにしてみたいのは、中野さんにおけるそうしたメディアとのつきあい方のいくつかの特徴である。